



蘭使日本紀行

三

ル 8  
1138  
3





門 3  
1138  
卷 3



田獵法

三七

同居スルヲ得。祝日ニ非サルヨリハ。村内ニ男子  
 ニ接スルヲ許サス。男子ノ所業ハ田獵ナリ。  
 田獵ノ法致様アリ。或ハ科藤及ヒ竹ニテ組ミタ  
 ル。隙ヲ森林及小逕ニ設ケ。鹿猪羊ノ通過シテ之  
 ニ掛ルヲ待ツ。或ハ平野ニ深ク竹ヲ刺シ。之ヲ彎  
 屈シ。小板ヲ以テ固ク停止シ。其上ニ廣ク隙ヲ張  
 リ。少シク土ニテ覆フ。鹿或ハ猪隙ニ達スレハ。棧  
 ヲ放テ。獸ノ頸或ハ足ニ纏ハルヘシ。則チ走り近  
 テ之ヲ捕フナリ。  
 更ニ獵ノ一法アリ。アサガライン  
 類ノヲ用フ。或

一八

一種獵法



ハ一村ヲ傾テ從事スルアリ。或ハ二三人同時ニ  
行フテアリ。其人ヲ分配シテ一ハ一里一ハ一里  
半ニ在テ圍繞ス。各三本ノ銘ヲ持テ犬ヲ野ニ放  
テ次第ニ周回ヨリ進ミ寄ル。獸既ニ一銘ニ中レ  
ハ獲テ遁ル可ラス。然銘ハ竹ニテ製ス。長サ人長  
ニ同シ。尖端ニ鏢ヲ具フ。四箇ノ彈鈎アリ。一長繩  
ヲ附シ之ニ鈴ヲ繫ク。獸ノ雜草間ニアルモ其音  
ヲ聞テ所在ヲ知ル一シ。  
或ハ矢ヲ用フ。殊ニ鹿ヲ多シトス。其肉ハ支那人  
ニ與ヘテ衣服ト交換ス。但シ獲ル所ノ鹿肉僅ク

ニ一齋ヲ食シ。内臓ハ鹹浸シ貯フ。鹿ハ其幼老ニ  
係ラス。皆直チニ殺シテ皮及毛ヲ保存シ。他用ニ  
供ス。  
又男子所業ノ第二件ハ鬪争ナリ。其法左ノ如シ。  
前以テ甲村ヨリ乙村ニ報告シ。是ニ於テ二十人  
或ハ三十人集合シ。銘ヲ以テ敵村ニ侵入ス。潜伏  
シテ夜ニ入ルヲ待ツ。暗ニ衆シテ野ニ出テ敵家  
ニ向テ之ヲ索ム。既ニ之ヲ得レハ。則チ其頭ヲ  
断ツ。或ハ更ニ手及足ヲ断ツ。或ハ全身ヲ屠リ。各  
人其一部ヲ取り。勇猛ノ徴トナシ。誇ルテアリ。然



レ丘原野ニシテ一人ヲ見サルハ其村ニ於テ一  
家ヲ襲フテ之ヲ破壊シ一人ヲモ許サズ敵ノ  
手足及頭ヲ奪ヒ或ハ頭髪ノミヲ取ルテアリ蓋  
シ敵村ニテ之ヲ防クノ準備アルカ或ハ攻者ノ  
力足ラサルハ上ノ如クスルテアリ或ハ却テ  
降伏スルテアリ或ハ敵ノ銛ヲ奪ヒ取り勇ヲ示  
スルアリ敵ニ對シテ死スル者ナク又怪我スル  
者モナキハ原野ヲ退散スルナリ  
其武器ハ大ナル楯ナリ全身ヲ匿スニ足ル矢及  
廣キ斧ナリ二三ヶ村相合シテ一二村ニ抗スル

テ屢之アリ但シ固ヨリ指揮者アルニ非ヌ唯多  
頭ヲ所持スル者之ヲ預カリ聞クノミ  
其欺計驚クヘキアリ屢其村ノ上端ニ於テ戰ヲ  
挑ミ秘カニ下端ヨリ侵入スルテアリ其時敵ノ  
ヲ其住所ヨリ驅逐シ之ヲ遮キル者アレハ則チ  
之ヲ殺ス一夜间ニ一村ヲ蹂躪スルテ屢之アリ  
一家ヲ殺戮スルノ後迂路ヨリ退散ス但シ前以  
テ大畧一尺許ノ篋ヲ斜ニ土中ニ刺シ固ノ以テ  
進路ヲ示スノ標ト為スナリ勝者既ニ敵首ヲ得  
レハ之ヲ背ニ荷フテ歸村ス而シテ唱歌シテ神力



呵護以テ其志ヲ得タルヲ鳴謝ス。殊ニ佳酒ヲ以テ厚ク饗應シ。衆人ヲ慰勞ス。十四家毎ニ一寺院ヲ設ク。則チ先ツ歆首ヲ寺ニ携ヘ之ヲ壺中ニ煮テ。肉ノ剥離スルニ至ル。次ニ大陽ニ曝シ乾カシ。酒ヲ注ク。十四日間。連日客ヲ招キ。豚ヲ屠リ。以テ神力ヲ感謝ス。此鬮騷ハ其人ニ於テハ。黄金及寶石ヨリハ最モ貴重トスル所ナリ。若シ火災。或ハ暴人等非常ノ事アルニ方テ。第一ニ之ヲ携ヒ去ルナリ。未ク一頭ヲ所持セサル村ハ常ニ他村ノ下風ニ

アリ。然レ凡首箇十二人アリ。共ニ大畧四十歳ニ年毎ニ新撰ス。其職終ル者ハ頭髮ヲ留メテ前額兩側ノ毛ヲ拔去ス。是往時ノ首箇タリシヲ標スルナリ。其威權頗ル盛ナリ。大事アレハ村人寺院ニ集會シ。各人其持論ヲ吐キ。順次議ヲ建ツ。而シテ議スル所ヲ述テ。以テ首箇ノ判決ヲ仰ク。此老主箇亦他人着用スルノ衣服ヲ奪ヒ取り。三月之ヲ用フルヲ得ルノ權アリ。神ニ兩ヲ祈ル片是ナリ。大抵之ヲ罰スルハ。婦人ニアリ。其祝日ニ於テ最モ盛飾セシ者ニ於テス。主箇ハ強液砂糖。ピータ



シグ。詳不。又脂肪ヲ併セ食ス。但シ米ハ半熟ニ収獲シ食ス。此ノ如クセサレハ。鹿猪ノ其田畝ヲ損害スヘキヲ恐ルナリ。

各人盜賊殺戮及菘溜ハ報讐スルノ念アリ。其長上ナルモ之ヲ保護スルノ朋友アルモ敢テ顧ルコトナシ。或ハ豚或ハ鹿野ニ於テノ事件ナルモ亦然リ。固ヨリ貴賤上下ノ別アルニ非サレ氏自ラ相親睦シ。幼者ハ道ヲ老者ニ譲リ。老者他ニ命シテ數里外ニ使役スルモ。幼者之ヲ辭スルヲ得ス。加之老人集會席ニテハ。少者一言ヲ発スルコト能

ワス。

男子二十一歳以内ニテハ。婚娶ヲ許サス。十七歳マテハ。長髪ヲ保存ス。結婚ノ状左ノ如シ。婚ヨリ其母或ハ血族ノ女友ヲ婦ノ家ニ遣リ。縁女ニ寄贈スルニ左ノ品々ヲ以テス。例之上衣八枚。下衣八枚。竹ニテ製スル指環四百箇。金属或ハ白鹿角ニテ製スル指環十二箇。赤色ノ犬毛ニテ績クル絲ヲ附ス。粗布ニテ製スル帶五筋。犬毛ニテ製セル帽十二支。那衣服三十枚。又犬毛ニテ製セル大ナル髮粧具之ヲアマムミアングト称ス。鹿皮



男婦家住

枕五對。是最上等ノ進物ナリ。他ハ其貧富ニ應シテ差等アリ。寄贈スル所ノ物品返附セサレハ是縁談整頓セルナリ。婿即直ニ同衾スルモ妨ナシ。此ノ如ク結婚スルモ男子ハ婦人ノ家ニ住居スル、ナシ。各々別居ス。夜中ノ男子婦人ノ家ニ来リ宿ス。然レ炬火或ハ燭ニ近接スルヲ許サス。無言ニテ蓐ニ入ルナリ。煙草或ハ他品ヲ欲スルモ敢テ之ヲ求ムルヲ得ス。唯警吠以テ其意ヲ示スノミ。其音ノ状ニ應シテ婦則チ彼此品ヲ與フルナリ。家事ヲ終フル後婦ハ蓐ニ就クナリ。休息所ニハ枕モナク。毛蒲團モナク。卧具モナシ。唯硬キ毛皮アリ。床ノ上ニ敷クノミ。或ハ竹製寢臺アルアリ。翌朝未明ニ男ハ無言ニテ出テ去ル。婦人自家ノ田畝ニ従事スル半部ナリ。其半部ハ男子来リ助ク。兩人各々一半ニ従事ス。晝間ハ男子其婦人ニ對シテ談話スルヲナシ。必ラス婦ノ許容ヲ待ツ。子ハ二十三歳マテハ母ノ膝下ニテ養育ス。此時ニ及テハ父ニ伴テ其家ニ至ル。婦三十七歳以内ニ妊孕スレハ残酷ニ胎児ヲ殺ス。則チ婦人卧蓐ニ横卧ス。招請ニサタル尼僧ハ姓

談話

息所ニハ枕モナク。毛蒲團モナク。卧具モナシ。唯硬キ毛皮アリ。床ノ上ニ敷クノミ。或ハ竹製寢臺アルアリ。翌朝未明ニ男ハ無言ニテ出テ去ル。婦人自家ノ田畝ニ従事スル半部ナリ。其半部ハ男子来リ助ク。兩人各々一半ニ従事ス。晝間ハ男子其婦人ニ對シテ談話スルヲナシ。必ラス婦ノ許容ヲ待ツ。子ハ二十三歳マテハ母ノ膝下ニテ養育ス。此時ニ及テハ父ニ伴テ其家ニ至ル。婦三十七歳以内ニ妊孕スレハ残酷ニ胎児ヲ殺ス。則チ婦人卧蓐ニ横卧ス。招請ニサタル尼僧ハ姓

尼僧



男子四十歳ニ至ルハ  
及テ始メ婚嫁ニ  
同座ス

婦ノ腹ヲ或ハ押シ或ハ踏ミ墮胎セシムルナリ。  
其辛苦實ニ恐ルヘシ。ゴトルギウスカニジウス  
氏ハエウアングリラムス氏ニ隨テ千六百二十  
八年ニ臺灣ニ到レリ其話ニ曰ク余カ知ル所ノ  
臺灣ノ一婦人上ニ記スル恐ルヘキ法ニテ墮胎  
セシメテ十六回ナリ。第十七回ノ妊娠ニ及テ始テ  
出産スルヲ得タリ。蓋シ子ヲ拳クルモ可耻ナキ  
年齢ニ達シタレハナリ。

婚嫁ニ至ル者ハ  
二住ノ

不和熟ノ為ニ離別スルナリ。以時ニハ一男每  
月一新婦ヲ娶ルナリ。若シ夫レ確切ナル事由ア  
リテ離縁スルニ至ルハ往日寄贈スル所ノ結  
納品ヲ取戻スナリ。此ノ如クセサルハ尚其婦ヲ  
保持スルナリ。或ハ一男ニシテ婦ニ婚スルアリ。  
但シ是婦ノ可耻所ナレバ娼妓姦淫ノ如ク尚流  
行スルナリ。  
婚嫁セサル者ハ村内別區ニ住居ス。十四家ニハ  
一寺院ヲ設ク。院内竊臺アリテ男子ノ来テ卧ス  
ニ供ス。蓋シ上ニ記スル如キ婦人ニ伴テ住スル



ヲ得一キ年齢ニ至ルマテ。此ノ如クスルナリ。  
臺灣人家屋ハ。印土ニテハ決シテ見及ハサル。精  
巧美饒アリ。小丘上ニ築ク。高サ人長ニ同シ。下天  
井ハ竹ニテ造ル。四戸アリ。四方ヨリ風ヲ入ル。  
シ。大家ニハ出入口又多シ。内外饒ルニ鹿及豚頭  
ヲ以テス。支那衣服及鹿皮アリ。家賤ハ鉈。楯。劍。弓  
矢。ホウ。ウ。エ。ー。ル。土ヲ碎ク。カキ。様ノ。モ。ノ。用。フル。 德利。狸。鉢。竹  
製ノ桶。及土壺ナリ。

就中。歌ノ毛髮。骨骸。及。鬮。髑。ヲ以テ。最上ノ饒トス。  
一般ノ祭日ニハ。家族皆各自ノ寺院ニ詣シ。舞躍  
飲食スルノ外。他ニ祝日ナシ。最貴ノ衣服ハ。赤漆  
セル。犬毛ニテ製スルナリ。

屍體ハ。二日間。割竹ニテ製シタル臺上ニ手足ヲ  
緊縛ス。此臺ニ火氣ヲ導キ。屍體ヲ徐々ニ乾カサ  
シム。此時。集會セル衆人。豚肉ヲ食シ。強液ヲ吞ミ。  
酩酊昏睡スルニ至ル。他人之ヲ醒覺スレハ。則チ  
屍室ニ入り。木柙ノ鼓ヲ敲ク。此音ニ乘シテ。婦人  
ハ一壺ノ強液ヲ撒布ス。是ニ於テ。屍室ニ在テ。舞  
躍ヲ始ム。其狀。驚クニ堪タリ。東洋ノ櫃ニ異ナラ  
サル大ナル。狸鉢ヲ覆シテ。屍體ヲ掩フ。而ノ衆婦



二列ヲナシテ背向シ。優シク手足ヲ動かシ。異音ヲ發ス。既ニノ疲勞スレハ。他人之ニ代ル。九日ニノ屍體乾燥ス。此時臭氣堪可ラス。之ヲ洗淨スル。九回ニノ筵ニテ卷キ。初回ヨリハ更ニ高キ臺ニ移シ。周回ニ衣服ヲ懸ケ。天幕狀ナラシム。此ノ如クニノ屍ヲ存スル。一三年乾燥シテ骨骸トナル。是ニ於テ屋内ノ墓所ニ葬ル。過貴ノ饗應ヲ設ク。病人アル所ニモ亦驗シク回舞ス。殊ニテスパニ村ニ於テス。人アリ大患及疼痛ヲ訴フル所ハ。索ヲ

ヲ頸ニ懸ケ。罪人ヲ呵責スルノ狀ノ如ク。押シ倒シ。急速ニ死ニ就カシム。台湾人ハ書籍ヲ有セス。文字ヲ知ラス。唯宗教アリテ人々相口授スルノミ。謂フ世界ハ始メテ終リナシ。魂魄ハ不死ナリト。故ニ死者アル家ニハ一室ヲ定メテ内ニ一桶ノ水ト。一片ノ竹ヲ備フ。以テ之ヲ汲ムニ供ス。魂魄常ニ存スルヲ以テ。其心ヲ清洗シ。懺悔スルニ足ルトス。又曰ク。凡ソ惡事ヲ為セシ者ハ。死後必ラス罰ヲ蒙リ。又善事ヲ行ヒシ者ハ。必ラス褒賞セラルト。是ニ於テ深



坟墓穴ニ狭キ竹橋ヲ架シ以テ魂魄ヲ幸福ナル  
 地ニ導クヘシトス。悪人此橋ヲ通過セントスレ  
 ハ忽チ顛覆シ其人苦楚ナル沼澤ニ墮ツ而シ善  
 人ハ容易ニ之ヲ通過スルナリ。  
 其惡業中ニ算スルハ妄語不信心。又一定時ニ至  
 ルマテ裸ニテ在ラサル。業スルニ至ルマテハ裸  
 體ニテ居ル不詳。縞布ノ衣服ヲ着スル。三十六  
 歳前ニ子ヲ拳クル。其時ニ牲ヲ献セサル。鳥  
 聲ニ注意セスノ他行シ。或ハ事ヲ管ム。又他人  
 ヲ欺キ物品ヲ盗ミ人ヲ縊殺シ及偽リ誓ヲ破ル等皆

許サレル所ナリ。

誓約スルニハ藁ヲ共ニ破碎スルヲ以テス。公然  
 トノ酩酊シ秘カニ娼妓ヲ買ヒ。又離縁スルハ自  
 意ニ任ス所ナリ。旅行スルヲ知ラス。各様ノ神  
 ヲ信ス。其最ナル者ハ夕マギサンハ夕ナリ。南方  
 ニアリ其配女夕キサシクバダハ東方ニアリ。今  
 夫レ東方ニ雷鳴アルハ夕キサシクバダ其男ニ  
 向テ何故ニ雨ヲ下サレルヤヲ呵責スルナリ。男  
 其争論ヲ領承スレハ。則チ雨ヲ雲間ヨリ下スナ  
 リ。又北方ニ一神アリサリアヒングト名ク其意



暴悪ナリ。何トナレハ夕マギサンハダハ。人身ヲ  
美麗ナラシメントスルニ。此神ハ痘瘡。尙倭及他  
ノ醜容ヲ附スルナリ。故ニ之ヲ祈テ此害ヲ免カ  
レ。ン。一ヲ求ム。鬪争アルニ方テハ夕ラヒユラ。及ヒ  
夕バリア。軍神ニ祈ル。

イニブスノ類ヲ稱スル婦人アリ。台湾人ノ公通ニ

信スル所ナリ。則チ二法アリ。一ハ神ヲ招キ一ハ

牲ヲ献スルナリ。イニブスハ鹿及豚ノ頭。蒸タル

糸ビナレグ。及強液ヲ捧ク。此ノ如ク諸品捧呈ス

ルノ後イニブスニ人。群人中ヨリ起チ奉リ。強聲

ヲ放チ。神名ヲ呼ヒ。酒盞ニ注視シ。失氣シテ昏倒

ス。既ニノ醒覺スレハ。煩惱戰慄ス。是神ノ靈魂憑

ルノ徴ナリ。此ノ如キニ至ルニハ。通例一時ヲ費

ス。圍繞スル所ノ衆人皆歩ヲ進ム。次テイニブス

二人ハ屋脊ニ上リ。共ニ其角ニ立ツ。而ノ久シク

神ニ説話ス。是ニ於テ服スル所ノ衣ヲ脱シ。陰部

ヲ曝露シテ。神ニ示シ。且手ニテ之ヲ敲キ。水ニテ

一身ヲ洗フ。而ノ周圍ニアル婦人ニ接近シ。各々

吸口スル。一強ク破裂スルニ至ル。

此ノ如キ公然タル信心ノ外。各人屋内ニテ行フ



所アリ此イニブスハ晴雨ヲ前知シ困厄災難ヲ  
除キ惡魔ヲ退治ス之ヲ行フニハ大聲ヲ放チ日  
本刀ヲ手ニ握リ氣中ヲ截リ上ニ記スルカ如ク  
魔ヲ拂ヒ終ニ身ヲ水ニ投シ之ヲ吞ム或ハ供物  
ヲ街上ニ置クコトアリ

此ノ如キ野蠻人中尚耶蕪教ヲ奉スル者多シ蓋  
シ東印土商會台灣人ノ為ニ貿易安穩ヲ祈ルニ  
始マル所ナリ耶蕪教幸ニ增多ス何トナレハ灣  
人ハ自負尊大ニノ決シテ他ノ下ニ在ルヲ肯セ  
ス死ヲ辭セスノ一心ニ固信スル所アレハナリ

猶全印土人ノ釋教或ハ嗎哈派ヲ偏信  
シテ耶蕪教ヲ排毀スルカ如シ且灣人  
書籍ナク又一定ノ宗教アルコトナシ故  
ニ連々變化シ唯イニブスヲ信スルノ  
ミ是ニ於テ其釋教ノ妄說ヲ脱セシム  
ルヲ復タ容易ナリ釋教ヲ固信スルノ  
婦人ノ魁タル者ヲ説諭スルニ在ルノ  
コト  
阿蘭人ハ此地ニ於テシンセオ及厦門  
ヨリ來ルノ支那船ト貿易スルナリ



易スル品物ヲ。或ハ何蘭本國ニ送り。  
 或ハ全印土ニ送ル。厦門ヨリ来ルノ  
 船遅滞スル所ハ日本或ハ伯帶尼亞  
 ニ向ハシカ為ニ直チニ厦門ニ航ス  
 ル。アリ。此地ニテハ絹一ビヨル  
 ビヨルハ百二十磅ナリ。ニ角十テール  
 ナリ。一テールハ三ギユルゲンニ當ル  
 一擔ハ十六貫二百四十三文三分一  
 一兩ハ金一圓五十六錢

臺灣ニハ頗ル多事ナリ。何トナレハ此島ニ於テ

西班牙ハキナ船支那及日本ノ為ニ悩マサレタレ

ハナリカスナリアーネン人能ク此事ヲ悟リ千

六百二十六年ニ臺灣ノ北方ニ上陸シ速カニケ

ラング城ヲ建築セリ然レモ是ニ安居スルヲ得

サリシ蓋シ早ク既ニ荷蘭人ヲテオフハンヨリ

驅逐スルカ為ニ多船ヲ航セシメントシタレハ

ナリ然レモ天幸ニノ颶風アルカ故ニ此企謀ヲ

妨ケタリ後ハ葡<sup>葡</sup>ガ<sup>瑪</sup>ル人<sup>港</sup>麻甲ニ在テ此企ヲ行

ハント<sup>シタレ</sup>ナ<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>モ意ヲ達スルヲ得サリシト<sup>然</sup>レ



五節 臺灣の歴史  
ヲ夫ノ後ナリ

中臺灣ニテ自由貿易ヲ行ハントスル日本人ノ  
為ニ容易ナラサル困難ヲ蒙ルレリ何トナレハ  
隠秘ナリトハ虽日本人ハ阿蘭人ヨリハ早ク是  
ニ至<sup>リ</sup>所ナリト<sup>ハ</sup>然レ<sup>モ</sup>其臺灣ニゼーラン<sup>ジ</sup>ア城  
ヲ築キシ以來ハ商業次第ニ衰頽セリ是ヲ以テ  
日本人ハ<sup>キ</sup>其執政ニ荷蘭人ヲ讒訴シ今之ヲ  
制セサレハ荷蘭人ケラシク城ヲ取り終ニ容易  
ニ全臺灣ヲ奪領スルニ至ル一シト

寛文二年<sup>一六六二年</sup>此島支那領ニ帰セリ支那ニ  
ハ驚ク一キ暴徒起リ漸ク蔓延セリ支那ノ一地

方シユキユア<sup>ン</sup>ニ峻山アリ山賊潜居シ村落ニ  
出テ貨財ヲ掠奪シ既ニ各地ヲ畧取リ勢ニ乘  
シテ次第ニ勇威ヲ逞フシ大ニ首府シ<sup>ン</sup>グ<sup>ク</sup>ユ  
ヲ侵<sup>ル</sup>掠奪<sup>シ</sup>領<sup>セ</sup>リ但シ久シク此地ヲ保存スルヲ  
得サリシ蓋シ支那ノ勇女シユキユエ<sup>シ</sup>ヨリ来  
テ大ニ山賊ヲ敗リ其營ヲ蹂躪シタレハナリ然  
レ<sup>モ</sup>賊再<sup>ビ</sup>勢ヲ張り衆ヲ集ム又キユイセウニ  
於テ一黨起レリ則チ二將校争フ<sup>ト</sup>アリテ一將  
終ニ罪ヲ言渡サルヲ以テ殺<sup>ス</sup>ルナリ去テキユ  
イシユノ賊黨ニ投シ彼罪ヲ言渡シタル人ヲ殺



シノ既ノ亞王チユタングノ兵ヲ驅逐セリ。然レ臣  
亞王ノ兵ハ再ヒ勇ヲ震フテ勝ヲ得前敗ノ災ヲ  
償フニ山賊ヨリ二倍ノ利ヲ得タリ。然リト虽此  
時蝗害頗ル盛ニ文那ノ北部七郡ヲ禿蝕シ隨テ  
大饑饉ヲ来シ又饑饉ヨリシテ盜賊ヲ起シ群盜  
相會シテ先ツ村落ヲ侵シ漸ク都市ニ及ヒ又賊  
黨八隊トナリ俠勇亦徒弟ヲ誘テ此群中ニ入り  
増加シテ軍隊ヲ編成スルニ至レリ。

此ノ如クニノ群盜各所ニ進歩シ全國ヲ横行シ  
貨財ヲ掠奪スル一山ノ如ク富有王家ニ擬ス是

ニ於テ各隊長ハ各冠ヲ戴ク此ノ如ク暴威ヲ張  
ルヨリ各隊長各自恣放逸相屈セス相争ヒ相戦  
フテ六人ヲ戮シ今僅カニ二長ノミヲ存ス則リ  
キユンキユス及カンギーンシユンギユス是ナ  
リ尚互ニ相及目ス尚切ヲ争フテ奪地ヲ相領セ  
ントス然レ臣二人共ニ同僚ヲ殺シタルヲ追  
思シ相戒メ相恐ヒ終ニ議シテリキユンギユス  
ハ南部シユンシ及ホナンヲ領シカンギーンシ  
ユシギユスハ北部シユキユエシ及ヒユキユア  
ンクヲ領シ相侵ス一ナキヲ約ス甲ハシユンシ



ヲ掠奪シテ骨ニ至ル。次テ富饒ナルホナシニ移  
 リ首府カイ<sup>シ</sup>ユ<sup>シ</sup>ング<sup>シ</sup>ニ住<sup>シ</sup>然<sup>シ</sup>レ<sup>シ</sup>氏<sup>シ</sup>再<sup>シ</sup>に襲ハレ  
 テ大ニ敗ル。壁破レ四邊餓餓スルノ状詳記スル  
 ニ恐ヒス。今方ニサマリア<sup>シ</sup>ア<sup>シ</sup>サギ<sup>シ</sup>ユ<sup>シ</sup>ン<sup>シ</sup>チ<sup>シ</sup>ニ<sup>シ</sup>ス<sup>シ</sup>及<sup>シ</sup>イ  
 エリユサレ<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>ノ有名ナル苦辛ヲ臆記スヘシシ  
 ヲ<sup>シ</sup>ング<sup>シ</sup>シ<sup>シ</sup>ニウス帝ノ兵勇ヲ敵シテ城ヲ困ミ千  
 六百<sup>シ</sup>四<sup>シ</sup>十<sup>シ</sup>二<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>大ニ賊軍ヲ敗レリ。抑モカイ<sup>シ</sup>ユ  
 シ<sup>シ</sup>ング<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>極テ低地ナリヒユア<sup>シ</sup>ング<sup>シ</sup>河ノ南側ニア  
 リ之ヲ距ル一里半水面常ニ地表ヨリ高シ故  
 ニ堅固ナル石ニテ堤ヲ築キ水害ヲ防クナリリ  
 ヲ<sup>シ</sup>ング<sup>シ</sup>シ<sup>シ</sup>ニウス帝堤ヲ決シテ水ヲリキユエ<sup>シ</sup>ン  
 グ<sup>シ</sup>ユ<sup>シ</sup>ス<sup>シ</sup>ノ營ニ溉カシム。此時河水非常ニ高漲ス  
 其水忽チ田野ヲ浸シ城ヲ沉ム。賊軍狼狽避クル  
 ニ所ナシカイ<sup>シ</sup>ヒユ<sup>シ</sup>ン<sup>シ</sup>ク<sup>シ</sup>城ノ壁ヲ起ルヲ以テ人  
 畜家屋寺院暫時ニ流没シ。往時舊帝ノ住所ナリ  
 シ者今一水地ニ變シ溺死スル者三十萬人ナリ  
 ト云フ。  
 然レ<sup>シ</sup>氏<sup>シ</sup>其後リキユ<sup>シ</sup>ング<sup>シ</sup>ユ<sup>シ</sup>ス<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>各地ヲ押領シ  
 制令頗ル好シ。終ニシユ<sup>シ</sup>ング<sup>シ</sup>シ<sup>シ</sup>ニウス帝ニ迫リ  
 北京ニ於テ宮闈ニテ先ツ其可誓期ノ女ヲ刺殺



韃靼人ノ  
シヤンチン  
ノ事ヲ  
記ス

シ次テ帝ヲ弑セリ。帝ニ三子アリ。長子ハ行ク所  
ヲ知ラス。二弟ヲ刎頸セリ。

諸事意ノ如キヲ得タリ。唯韃人ヲ防ク為ニレ。ア  
オケユング境界ニ在テ注目スルユサンギユエ

イウスノミ之ニ抗セリ。則チ使者ヲ送り親睦セ  
ン。トテ請フユサンキユエイウス之ヲ聽カス。何

トナレハ之ヲ怒ムヲ以テ八萬ノ兵ヲ具スルノ  
韃靼王シユングテウスト心ヲ合セ賊ヲ討ント

欲スレハナリ。但シ賊ハ此謀ニ聞セスシテ北京  
ヨリ支那大明帝ノ二百八十年間貯畜スル所ノ

財寶ヲセシシ地方ニ運輸セリ。金銀財寶ヲ四門  
ヨリ運輸スルヲ連八日而ノ馬人夫駱駝ヲ以テ

運輸スル所ハ唯貴價ナル財寶ノミナリ。然ルニ  
リギユングシユス自ラ帝位ヲ占ムルノシガニ

ノ道ニ於テ韃人ノ為ニ此財寶ヲ奪領サレタリ。  
既ニ其富ヲ有スルヲ以テ北京ヲ押領スルヲ得

タリ。更ニ歩ヲ進メテ各地ニ及ヒ。終ニ亡妃ノ所  
生ニテ南テ六歳ナルシユンシニシユングテウ

ス帝ノ冠ヲ頭上ニ置ケセリ。  
然レ氏ユサングエウスハ韃帝之ヲ尊テセンシ

韃人ノ事  
ノ事ヲ  
記ス



ノ王ト為セリ。蓋シ此人ヲ此地ニ在ラシメテ以テ支那ヨリ韃靼ヲ侵スノ機會勿ラシムルナリ。而ノリキユングシユスハ大ニ之ヲ討チ其兵ヲ奪ヒ生サス殺サスナラシメリ。紛乱此ノ如キヲ以テ支那人ハ大明ノ遺胤ヲ索メテ帝タラシメントスルノ意アリテ彼此之ヲ謀ル者アレ氏皆遂ニ志ヲ達スルヲ得ス。且支那全國到ル所悉ク盜賊ノ衢トナル。海上亦海賊ヲ免カレス。シニシリエレクト云フ者アリ。外國人ハ之ヲイキユオシト云フ其始ホトガレ人ノ奴トナリテ麻

甲ニ在リ。後阿蘭人ニ隨テ臺灣ニ至ル。他ニ使役セラルヲ厭フテ支那ノ遁亡人ニ謀リ一隊ノ舟ヲ往還セリ。次第ニ勢力ヲ得印土ノ貿易為ニ減退スルニ至レリ。蓋シ呂宋ノ西ボマ人台湾及伯比亞ノ阿蘭人瑪港ノ平ル葡カル人及日本人ト貿易スレハナリ。彼唯支那品ノミヲ輸出シ而シテ支那ハ歐羅巴品ヲ輸入シ。後終ニ三千船ヲ領スルニ至レリ。而シテ常ニ支那ノ帝位ヲ占メントスルノ大志ヲ抱ク。韃人之ヲ偵知シ彼ヲ欺キ之ヲ奪テ一王トナシホキーン



及キユアンチユングヲ興フルヲ約シ以テ其兵器ヲ奪ハントセリイキユオン之ヲ聽カス船ヲ舩シテ首府ホセウニ迫リ上陸シテホキーンノ韃玉ヲ截リ更ニ北京ニ侵入セントス其子弟ハ此暴行ヲ知テ走テ船隊ニ入り再々海上ヲ不安穩ナラシメ終ニ臺灣ヲ侵セリ

國姓爺ハ姑ヒユトマンノ一裁縫エナリ後チアオンノ指揮官トナリ今此船隊中ニアリ曾テ大ニ荷蘭人ヲ恨ムコトアリ蓋シ其原因ハ韃人ニ敵セシキニ之ヲ助ケサルヲ以テナリ今六百艘ノ

船ヲ舩シテ銃砲四十門ヲ備フ文那ヲ度シテ臺灣ニ向ヒ俄カニ上陸シテ家屋ヲ蹂躪シ老サヲ撰ハス殺戮ヲ肆ニス狼狽逡巡スルノ婦女ヲ射或ハ截リ或ハ鼻ヲ削リ或ハ耳ヲ削リ而メ之ヲゼイランジケ域ニ向テ不面目ニ驅逐シ或ハ之ヲ寸斷ス此ノ如キノ暴行終ニ三人ノ宣教師ニ及ヘリ則チアンドニウスハムブルックアルノルジユスヒンセンニユス及ビテルミユス是ナリ其暴行残酷名状ス可カラズ人ヲシテ戰慄セシム第一戰ニ於テケラシ城陷ル蓋シ弱カニノ



此強兵ヲ拒クヲ能ワサレハナリ。貸賂皆掠奪セ  
ラル。支那人勝ニ棄シテゼイランジア城ニ迫ル  
此城ニハ三重ノ壁アリ。臺灣トバキソロハヤ島  
トノ間ノ海峡ニ在リ。此城ノ麓ニ荷蘭人住ス。別  
ニ一城ヲ為セリ。此戦ハ支那人ノ久シク意中ニ  
在リシ所ナリ。之カ為ニ其船ヲテオアンノ上ニ  
置キ自在ニ貿易場ト為サントスルナリ。而ノテ  
オアン内ニハ銃ヲ備一家屋ハ牛皮ニテ被ヒゼ  
トランジア城ニ向テ井樓ヲ築クノ準備ヲ為ス  
又サリアントカ官名ハシスユルリアンハ影シ

キ所有品ヲ國姓爺ニ寄贈セリ。是ニ於テ愈根脚  
ヲ固ム。裁判所ノ後ニ一ノ隠レ所アリタルニ支  
那人千七百ノ銃ヲ放射シテ終ニ之ヲ奪ヘリ。且  
更ニ一井樓ヲ築ク。之カ為セトランジア城大ニ  
害ヲ蒙ムレリ。支那兵百人以上氣中ニ在テ銃ヲ  
放ツ。故荷蘭人ハ火繩ヲ備ヘテ支那人ノ近接ス  
ルニ及テ彈藥庫ニ放火セリ。其災害ノ大ナルト  
大ニ支那人ヲ恟マセリ。

伯帶比亞ヨリ海船来リテセイランジア城ヲ援

フ。而ノ初戦効ナシ。何トナレハ支那人ノ居所ヲ



支那人  
文那  
四

襲ハシカ為ニ。バキソムハヤニ上陸シタルニ。茲  
ニハ三百八十人ノ之ヲ防禦スル者アリシヲ以  
テ却テ不覺ヲ取リシナリ。是ヨリ前ニ國姓爺ヨ  
リセーランシア城主フレデリキコイエトニ告  
テ曰ク。捕フル所ノ宣教師アントニウスハムブ  
ルークヲ送附スヘシ。依テ之ニ代ルニテオアン  
市及セーランジア城ヲ交共スヘシ。若シ之ヲ肯  
ハサレハ各宣教師ヲ悉ク殺戮シテ許ス所ナカ  
ルヘシトコイエト之ヲ聽カスシテ事ヲ象セシ  
ナリ。是ニ於テ支那人再ヒセーランジアヲ圍ミ

防拒亦頗ル勉ム。然レモバキソムバヤ敗績ノ後  
勇氣ヲ挫クヲ以テコイエト支那人ニ約スル  
アリ。左件ノ如シ。  
城内ノ者退散スヘシ。肯テ之ヲ妨ケサルヘシ。捕  
人ハ總テ之ヲ放免スヘシ。セーランジア城貨賫  
及所有ノ貨幣ヲ償フニ金十トシヲ以テスヘシ。  
又銃四十挺ヲ支那人ニ送ルヘシト。而シテ五船ヲ  
以テ人員ヲ伯帶比亞ハタヒニアニ送レリ。茲ニ至テコイエ  
トハセーランジア處置當ヲ失スルノ罪ヲ以テ  
入牢セリ。抑モ損害頗ル大ナリ。何トナレハ支那



人ハ荷蘭商船ノ日本ニ赴ク者アルヲ見ル毎ニ  
臺灣ヨリ出テ常ニ之ヲ悩セハナリ然レモ支那  
ノ韃靼帝ヨリ伯都北西報政ニ使者ヲ送り曰ク  
カヲ合セテ支那賊ヲ臺灣ヨリ驅逐セント欲ス  
ト

臺灣ヨリ日本使節バロクホーヒウスノ一行出  
帆シテサレタクラハニ向テ四國ノ南角ニアリ  
山多ク海中亦低礁多シ地面ノ一地方ニ向テ翌  
日強風アリ故ニ揚帆ヲ却シ下段ノ帆ニテ洋ニ  
出ツ八月十七日ニ長崎ノ一角ヲ見ル然レモ判

然ナラス但シ尚之ニ向テ進行ス日午之ニ近接  
セリ此時大ニ危難ヲ抱ケリ蓋シ不案内ニノ低  
海ヲ過レハナリ舟士ハ多島ヲ見テ以テ長崎ノ  
海港ナリト為セリ故ニ再ヒ洋ニ出ツ是ニ於テ  
日本船ニ艘ヲ見ル共ニ帆ヲ張ル之ニ近接スル  
片大ニ衝突ヲ蒙ルレリ而シテ其船ハ南去スルヲ  
以テ別船ニ近接セント欲シタレモ導水者之ヲ  
肯セス

十八日朝前日見ル所ノ角ハ北々東ニアリ船ヲ  
距ル一五里半ナリ五島島ハ北々西ニアリ是ヨ



リ直進スレハ午後ニハ野茂ノ角ニ至ル一シ南  
西ノ方有馬ノ曲ヲ駛過ス四里ニノ野茂ヲ北東  
々ニ見ル北緯三十二度ナリ小帆ヲ張テ東北ニ  
向フ而ノ風ニ任ス翌日諸帆ヲ張ル此ノ如クニ  
ノ船ヲ北ニ向ケ長崎港ニ入ル山上ニ尖岩アリ  
突起シテ塔ノ如シ此山後則長崎ナリ大畧南六  
里ニアリ之ニ入レハ一二ノ島アリ別ニ大島ア  
リ中間穿透ス小舟ヲ通過スヘシ日午長崎ニ達  
シ深サ六尋半ノ瑤底ニ投錨ス忽チ阿蘭船六艘ヲ  
見ル則クリヒウーレゲコローシデリーフデマ  
ースラントカムベシウイッテバートルド及フハル  
クナリジルクススークハ曾テ長崎ニ在ル東印  
土商會ノ主裁タリ又ピリパスシルレマンスハ  
ヤ<sup>東京</sup>ンキレグノ指揮官ナリ此船隊ノ長ハ就中ア  
ンドラースフリシウスナリ<sup>伯帯比</sup>バタセア<sup>領事</sup>執政ヨリ  
定規ニ據リ前ノ亡使者ブロクホーヒウスノ代  
役タルナリ大ニ世事ニ熟煉セリブロクホーヒ  
ウスノ遺體ヲ保存スルニ注意シ盛粧以テ之ヲ  
土中ニ埋葬ス但シ日本人及諸印土人皆葬ニ會  
セリ



アムステルダム

中ニ對華ノ所ニ日本入及諸國任入習藝ニ會  
ヤスノ貴麗キ新器ノハニ出意ニ盛珠ノテ  
對ルハナリ大ニ世帯ニ應勅ナリテロハホ  
多財ニ對リ所ノ子封者テロハホ  
コトナリトスレバニシヤ  
東亞ノ事ハ  
土商會ノ主務ナリ又コトナリ  
ノ事ナリトスレバニシヤ  
ノ事ナリトスレバニシヤ  
ノ事ナリトスレバニシヤ

十月一日ニジルクスヌトク氏船長崎ヲ発シテ伯  
帶尼亞ニ赴ケリ次テアントニウスフロングル  
ルクホルスト人代テ此地ノ主宰タリ此人ニ使  
節アンドラースフリシウス氏附添ヒ共ニ江戸  
ニ至リ日本王將軍ニ拝謁シ阿蘭人日本ニ於テ貿易  
スルヲ許可セシメ謝スル為ナリ此ノ如キ緊要木切  
ナル使節ナルヲ以テ同勢ヲ慕レリ長崎ノ庫高館内  
ハ大ニ多事紛乱セリ而シテ騷キ乱ル上ニ記スルカ如ク  
阿蘭人ハ平戸ヨリ引移ラサルヲ得ス則チ十六  
百四十一年寛永十八年辛巳  
明正天皇十一年  
家光公十九年



リ長崎ハ平戸ニ勝ル。固ヨリ論ナシ。阿蘭人商  
業ニハ大ニ適セル地ナリ。

平戸ニハ一ノ見ルヘキ物ナシ。唯一城アルノミ

平戸候茲ニ住ス。其城奇麗ニ植付タル地面ニア

リ青キ堅石ニテ造レル橋アリ。之ヲ過キテ城門

ニ入ル。両側ニ三十人ノ兵卒アリテ銃ヲ肩ニス

門ニハ二重ノ屋脊アリ。下層ハ上層ヨリハ延長

ナリ。門ノ一方ニハ國王ノ記事アリ。他ノ一方ニ

ハ平戸候ノ記事アリ。本城ハ高丘上ニアリ。大ニ

遠望スヘシ。七層ノ高塔アリ。愈上レハ愈小ナリ

城ノ双方ニハ戸アリ。各々長階ヲ附シ。丘ヲ穿ツ

但シ其廣サ前門ヨリ宮殿ノ中戸ニ達スルカ如

キニ及ハス。下ニ四箇ノ休息所アリ。圓形ニ造レ

リ。廊下アリテ四角ナル柱ニ相集合ス。其他平戸

ニハ記スヘキナシ。

今使節アンドラリスフリシウス氏。日本王ニ拜

謁スルノ旅行ヲ記スルニ方テ先ツ日本ノ大畧

ヲ概説スルヲ要アリトス。何ノ年ニ於テ帝國日

本ヲ創見セシヤヲ知ルヲ要ス。之ヲ日本歴史中

ヨリ抄録ス。

アンドラリスウス  
將軍記事



日本列島  
西ノ部  
四六

ヨアンネスペドリユスマツセイユス日本ヲ記  
スル所尤ノ如シ。曰ク尋常日本ト稱スルハ。三大  
島ヲ総括ス。更ニ多島ノ周圍ニアルアリ。分テ五  
十三州トス。首府ハ京都ナリ。全國ヲモ亦斯ク言  
フ。按スルモ亦和州トハ和州ニアリ。而シテ全  
國ヲモ亦和州トハ和州ニアリ。而シテ全  
第二ハ九州分テ九州トス。其最ナル者ハ。ホシユ  
キユム。及。肥前。キユム。詳ナリ。第三ハ四國。分  
テ四州トス。土佐ヲ最トス。日本全國分テ六十六  
州トス。全國ノ長サ殆シト二百里。幅ハ之ニ適セ  
ス。某ノ地ハ僅カニ十里ニ過キス。最モ廣キモ三  
十里ニ過キス。全周圍ハ。未ク確説ヲ得ス。北緯三  
十度ヨリ。三十八度ニ至ル。東ハ新西班牙ニ對ス。  
相距ル。一。百五十里。北ハヒールテン。則韃靼。及未詳  
ノ未開地ナリ。西ニ支那アリ。海岸ノ出入ニ應シ  
テ距離一ナラス。支那ノ東部最端ニアルリアム  
ボヨリ。日本ノ五島ニ至ルハ。六十里ナリ。五島ハ  
於テ最モ先ツ。又葡萄牙人多ク貿易スル所ノ支  
見ル所ナリ。又。瑪。港。ヨリ前ノ五島ニ至ルハ。二百  
那ノ西部。ア。マ。カ。レ。ヨリ前ノ五島ニ至ルハ。二百  
九十里ナリトス。此兩國ノ中間南海ハ未ク知ル  
所ナシ。是往時。或ハ日本ニ漂着スル者アリタレ



凡。未。夕。帰。航。セ。シ。者。ナ。シ。  
 全。國。多。ク。ハ。雪。ア。リ。寒。冷。ナ。リ。富。饒。ナ。ラ。ス。秋。時。禾  
 ヲ。収。獲。ス。衆。人。ノ。常。食。ナ。リ。某。ノ。地。ハ。於。テ。ハ。五。月  
 小。麥。ヲ。収。ム。之。ヨ。リ。我。法。ニ。倣。フ。テ。蒸。餅。ヲ。製。ス。ル  
 ヲ。知。ラ。ス。唯。酒。及。麩。ヲ。作。ル。ノ。ミ。  
 氣。候。ハ。平。和。ニ。シ。テ。安。全。ナ。リ。彼。此。ノ。地。ニ。温。泉。湧  
 出。ス。以。テ。醫。用。ニ。供。ス。

高。山。ヲ。見。ル。一。二。所。一。ハ。其。名。ヲ。詳。ニ。セ。ス。常。ニ。噴  
 火。ス。其。巔。ニ。ハ。魔。ア。リ。テ。住。ス。常。ニ。雲。ニ。テ。蓋。フ。人  
 或。ハ。祈。誓。シ。テ。久。シ。ク。祈。食。シ。瘦。削。ス。ル。ニ。至。ル。ア

リ。一。ハ。富。士。山。ト。名。ク。雲。間。ニ。聳。フ。ル。一。致。里。ナ。リ。  
 礦。坑。ア。リ。數。品。ヲ。産。ス。遠。人。來。テ。操。作。ス。

樹。木。ヲ。植。ユ。ル。ニ。美。觀。ニ。供。ス。ル。ア。リ。其。果。實。ヲ。賞  
 ス。ル。ア。リ。我。邦。ニ。異。ナ。ラ。ス。一。種。拓。植。ニ。類。ス。ル。木  
 ア。リ。其。性。怪。シ。ム。一。シ。水。ヲ。堪。ル。一。ナ。シ。若。シ。滋。潤  
 ス。レ。ハ。直。チ。ニ。萎。凋。ス。ル。一。猶。毒。ニ。觸。ル。片。ノ。如。シ。  
 之。ヲ。扶。助。ス。ル。ニ。ハ。根。ヲ。拔。キ。太。陽。ニ。晒。シ。乾。カ。シ。  
 木。屑。及。乾。砂。ヲ。盛。ル。ノ。別。盆。ニ。植。ユ。ル。ナ。リ。此。ノ。如  
 ク。ス。レ。ハ。既。ニ。枯。死。セ。シ。者。復。ヒ。蘗。生。繁。茂。ス。ル。ニ  
 至。ル。ナ。リ。落。々。タ。ル。カ。或。ハ。伐。リ。取。リ。タ。ル。枝。ヲ。幹



ニ釘付ニスレハ。復タ発育ス。之ヲ刺スモ同シ。植  
物中杉ヲ最モ多シトス。高ク且太ク発育ス。以テ  
宮殿ノ柱トナシ。船舶ノ樁トナスニ宜シ。  
日本人ハ羊豚雁及鶏ヲ飼ハス。肉ヲ食スルハ  
必ラス野獸シカ肉ナリ。牧野ニハ牛及軍馬多シ。小  
森及刺アル樹ニテ兔野猪鹿ヲ捕フ。鳥類ニハ雉  
子鴨野鳩及飼鳩鶉及野鶏アリ。魚類多シ。殊ニホ  
ーレン河魚不詳ハ多ク用フル所ナリ。牛酪ヲ知ラス。  
又橄欖油ナシ。海濱ニテ獵スル鯨魚ノ油ヲ用フ。  
賤人ハ松枝或ハ穀物ノ殻ヲ火炬ニ代フ。

日本人ハ。犬高ク。體格恰好ナルヲ自慢ス。多クハ  
活潑ニシテ強カナリ。六十歳マテ軍役ニ供ス。頗ル  
長キ髪ヲ生ス。頭容ハ各種ナルノ風習ナリ。少年  
ノ者ハ前頭ヲ剃シ。中年及農民ハ半頭ヲ剃シ。貴  
人ハ殆ント全頭ヲ剃シ。僅カニ後頭ノミニ少許  
ノ髪ヲ存ス。  
生命ニ拘ハル難澁。饑渴熱寒ニ遇フモ。之ヲ堪フ  
ルノ頗ル驚クヘシ。其出産スルヤ直チニ寒氣ニ  
觸レシノ更ニ河水ニテ之ヲ清洗ス。既ニ離乳ス  
レハ。獵ヲ習ハシメ。生母及乳母ト離隔シ。之ヲ寂



莫ノ地ニ置ク。謂テク此ノ如クスレハ軟弱温柔  
ニシテ養育スルモノヨリハ能ク事ニ堪ユルナ  
リト。

床ニハ畳ヲ敷キ。恰モ卧床ノ如クナラシム。石或  
ハ小杖ヲ頭下ニ置テ。之ニ卧ス。脚ヲ屈シテ腹下  
ニ置キ。坐シテ食シ。且安居ス。支那人ノ如ク不潔  
ナラス。食事ニハ二本ノ小提箸ヲ用フ。之ヲ使用  
スル。極ノテ巧ニシテ。狭ム所ノ物ヲ脱落スル  
ノナク。又指ヲ汚ス。ナシ。食堂ニ入ルニ。盥ヲ用  
ヒサルハ敷物ヲ損セサルカ為ナリ。賤民殊ニ海

岸ニ住スル人ハ野菜及魚ヲ食シテ保生スル  
ナリ。富人ハ支那風ニ美食ヲ嘗ム。卓布及手布ヲ  
用ヒス。奇麗ニシテ大ニ震揺スル。膳ニ各菜ヲ備フ。  
此膳ハ杉或ハ松ニテ製ス。調理セル食物ヲ山ノ  
如クニ盛り。金ヲ撒シ。傍ニシブレスタキスケン  
ス。樹名ヲ刺ス。或ハ貴人ノ食膳ニハ。嘴及足ニ鍍  
金セル。全鳥ヲ画クアリ。蒔繪ノ梳異國人及来客  
ヲ遇スル。丁寧親切ナリ。凡ソ飲食スルニハ。各  
般ノ禮式アリテ。甚夕領悟シ難シ。各人能ク之ヲ  
行フ。蒲桃酒ヲ製スルヲ知ラス。米ヨリ酒ヲ釀成



ス殊ニ未茶ヲ沸湯ニ和シ用フルヲ大ニ愛翫ス  
此茶事ニハ心ヲ用フルヲ極メテ勉ム貴人自ラ  
之ヲ行フレ朋友ト親和懇交ノ意ヲ表ス之ヲ行  
フニハ別室アリ則爐アリ蓋アル釜ヲ置キ之ヨ  
リ汲テ客ニ供スルナリ

此室内ニテ来客ニ所持品ヲ觀ニ供スルヲ以テ  
無限ノ采トス則茶事ニ使用スル諸器アリ曰ク  
爐三脚ノ壺水漏斗能土製茶碗德利匙未茶ヲ貯フル小壺  
ナリ此諸器ハ日本人大ニ貴重スルヲ猶歐羅巴  
人ノ金環及真珠紐ニ於ケルカ如シ其價ハ工人

ノ自ラ定ムル所ニノ貴キ一驚ク一シ一品或ハ  
五千ル一ベルス金貨ニ丁ルアリ  
多クハ木製造屋ニ住ス是屢地震アルヲ恐ルニ因  
ル或ハ石室アリ頗ル精巧ナリ又結構ナル寺院  
立派ナル神社アリ男女參詣ニ供ス

日本言語ハ甚タ平凡ナリ然レモ各様アリテ談  
話スルニ方テハ自他自位ニ應シテ異ナリ一事  
ニ致称アリ或ハ尊敬ノ語アリ卑賤ノ語アリ貴  
人ノ語アリ衆人ノ語アリ又男子ノ語アリ婦人  
ノ語アリ各一ナラス又談話ノ語ト筆記ノ語ト



(四)

別アリ書牘ト書籍ト其語ヲ異ニシ其數極テ夥  
 シク或ハ韻ヲ踏マサルアリ又高尚ナル詩ノ如  
 キアリ又日本人ニハ一種ノ語アリ一字能ク一意  
 ヲ存ス支那及汎日土字ニ異ナラス故ニ日本語  
 ヲ學フハ甚ク難シトス

日本人大ニ鬪争ヲ好ム其武器ハ手銃弓矢ノ外  
 更ニ彎刀及鎗ナリ而<sup>男子</sup>十ニ歳ニ及ハ則チ使  
 用ヲ習フカ鎗ハ剛鉄ヲ以テ鍛治ス能ク歐羅巴刀  
 ヲ截テ又ヲ損スルヲナシ又金銀ヲ以テ粧飾セ  
 ル投矢アリ又其鎗ヲ使用スルノ輕捷ニ<sup>堪</sup>久時

ナルヲ我輩ニ過クルヲ著シ

衣服ヲ愛スルノ類回ナリ小兒ヨリ童年ニ至ル  
 各々禮式及風俗アリ既ニ童年ニ及ハ長クノ  
 躰ニ達スルノ外套ヲ服ス屋内ニ在テハ外套ヲ  
 脱ス但シ他行スルニハ同シク溜キ袴ヲ着ケ腰  
 部ニテ掲ケ狹ク外套ニハ短カキ羅紗切ヲ附ス  
 日本人之ヲ紋ト称ス<sup>張付紋</sup>袖ハ<sup>腕</sup>及フ此服  
 ハ夏日ハ單ニシ精布ヨリ製シ冬日ハ粗ニシニ  
 重ナリ蚕綿ヲ盈ツ其製極メテ巧ニシ綿ノ離脱  
 スルヲナシ履ハ踵當ヲ具セス上階ノ如クシテ



輪狀ノ緒アリ。大趾ト第二趾ノ間ニコレヲ狭ム。  
 金箔ヲ撒スルノ扇ヲ持ツ。是面ヲ覆ヒ。又風ヲ煽  
 クニ供ス。貴人ハ笠ヲ冒リテ。日光ヲ避ク。賤人ハ  
 男女共ニ露頭ニテ晴雨ニ拘ラス。歩行ス。  
 日本ニテハ黒色及ヒ紅色ヲ祝事ノ徴トシ。白色  
 ヲ凶事ノ徴トス。食事及衣服ハ歐羅人トハ全ク  
 相及ス。我カ香料ノ如キヲ帶フルヲナシ。我カ美  
 味トスル者ヲ嫌フ。彼ノ美味トスル所ハ。我カ避  
 クル所ナリ。我ハ冷水ヲ飲ム。彼ハ冬夏共ニ温用  
 ス。彼ノ緩ナル歌曲ハ。我カ耳ヲ喜ハスニ足ラス。  
 齒ハ我ハ白色ヲ愛ス。彼ハ黒色ヲ貴フ。故ニ黒物  
 料ヲ以テ常ニ染ムルナリ。朋友及男子ハ。婦人ニ  
 前行シ。後者之ニ隨フ。我ハ階ヲ上ルニ左ヨリス。  
 彼ハ右ヨリス。祝スルニハ我ハ帽ヲ脱シ。頭ヲ露  
 出ス。彼ハ上階ニ於ルカ如ク。履ヲ脱テ。稍足ヲ進  
 ム。我ハ朋友ヲ迎テ立ワ。彼ハ坐ス。我ハ寶石ヲ大  
 ニ貴重ス。彼ハ鍍及磁器ヲ愛翫ス。藥劑ハ我ハ甘  
 ツノ甕ク煮タルヲ用フ。彼ハ塩氣アリ。渋キヲ患  
 者ニ微温用ス。我ハ雛鳥及肥セル鳥ヲ用フ。彼ハ  
 魚及貝ヲ用フ。我ハ屢浮血ス。彼ハ否ラス。若シ政



牙内政書

羅巴人彼ヲ嘲弄スルニ。此諸件ヲ以テスレハ。彼  
 必ラス平<sup>硯然トシ</sup>氣<sup>トシ</sup>テ。以諸件ヲ以テ抗論スヘキナリ。  
 此ノ如ク彼我其風習ヲ異ニスト。虽然レ此交際  
 上ノ人情ニ於テハ。敢テ異ナルヲナシ。國土ヲ差  
 配スル主領ヲ総称シテト<sup>ニ</sup>カ<sup>殿</sup>ト云フ。但シ此トニ  
 中各等ノ階級アル。猶歐羅巴ニテ<sup>ト</sup>コ<sup>ニ</sup>ンゲ  
 ン<sup>ハ</sup>ルト<sup>ト</sup>ゲ<sup>ン</sup>マルクガラーヘン。及<sup>ガ</sup>ラーヘ  
 ン<sup>アル</sup>カ如シ。此威權ハ金銀貨賤ニ由ルニアラ  
 ス。又従僕ノ多キニ由ルニアラス。何トナレハ大  
 主領ハ其家屋及ヒ血族ニ土地ヲ割與シ。彼ノ法  
 則ヲ守ラシム。但シ定貢アルニ非サレハナリ。此  
 土地ヲ割與スル片<sup>定誓</sup>約アリ。曰ク借リ人ハ<sup>無事</sup>和<sup>事</sup>平  
 ノ日ニハ<sup>主</sup>王ノ平<sup>常</sup>日ノ職務ヲ準シ。軍事アレハ其  
 其自用及雜費ヲ供給スヘシ。是ニ於テ<sup>主</sup>王ハ貧困  
 ニ陥ルモ家臣多ク<sup>奉</sup>勤仕人多キカ為ニ。尚其威權  
 ト官職トヲ失スルヲナシ。然レ此心志高尚ナル  
 ヲ以テ。死ヲ顧ミス。困厄ヲ辭セス。能ク其職務ヲ  
 失ワサルハ賞スヘキナリ。若シ年齢衰頽スレハ  
 自家ノ給養ヲ保持シテ。其子或ハ他人ヲシテ我  
 カ後ヲ受ケシノ。國政ニ參攝シ。更ニ注意シテ。切



主ヲ補佐スルナリ。

日本人ノ第二等ハ國人ノ邪教ヲ信スルヲ注意スル人ナリ。頭髮及ヒ領髭ヲ剃除シ、潔齊修行、縁組ヲ絶シ、隱惡姦淫ヲ避ケ、佛教及ヒ國法ヲ遵守シ、世人ニ注目シ、金錢ヲ募ルルヲナシ、高官貴族ノ屍ヲ守リ、佛堂ニ於テ衆僧併列シテ、經文ヲ唱フ。又望ニ應シテ衆人ノ為ニ説教ス。其宗派極ノテ多シ。然レモ総称シテ坊主ト云フ。多クハ貴族ヨリ出ツ。何トナレハ大家ニテモ多子ナルカ。或ハ家計不給ナル中ハ、某ヲ坊主ト為セハナリ。各地ニ

ニ大學校アリ。過多ノ所領ヲ有ス。故ニ往時ハ日本貴族ノ上等ニ列セリ。然レモエウアングリセ光明現出スルニ及テ、人民其詐偽ヲ悟リ、次第ニ舊教衰微シテ、復タ振ハス。第三等ハ紳士及他ノ貴族ナリ。多クハ王家ニ仕テ、武功アル人、詩人、老武人ナリ。又精巧ノ職人及出板者ナリ。

最下等ハ農民ナリ。貧困ナルカ為ニ有力者ニ使役セラル。其數極ノテ多ク、大ニ歐羅巴ニ過ク之ヲ概スルニ、人民伶俐敏捷ニシテ、思慮當ニ東方人



ニ勝ルノミナラス更ニ西方人ニ勝ル所アリ好  
學ニノ覺性アリ是農民ニ於テモ小兒ニ於テモ  
判然タル所ナリ則行儀正シク才氣活潑ナレハ  
ナリ且一人ノミニアラス又其羅甸語及學術ヲ  
領解スルト歐羅巴人ヨリハ大ニ容易ナリ貧困  
ハ耻辱ニアラストシ誹謗スル者ナシ又之ヲ見  
ルトヤナシ詳カニ其生計ヲ察シ止ムヲ得サル  
ノ不幸ヲ知ル詈罵盜賊不信心及諸博奕ヲ好マ  
ス  
大ニ名譽ヲ好ミ大小事ニ拘ラス言語ヲ慎ム蓋  
シ他人ノ信セントヲ求ムレハナリ他ヲ輕蔑セサルノミナラ  
ス更ニ横柄ニセス故ニ各人相互ニ尊敬シ殊ニ貴人ハ各其職  
務ト勲賞ヲ空フセサラントス卑賤ノ職エ日雇夕リ能ク雇  
主ノ指揮ニ隨ヒ敢テ其命ニ背カス此ノ如クナラサレハ雇主怒  
テ其賤ヲ抛テ其事業ヲ休止セシムルナリ

五〇

故ニ彼輩固定及ヒ彙頓ヲ保持シ穩順沉静ニシテ驚駭セスシ  
テ次第ニ之ヲ休止シ謹慎シテ時ヲ待テ其言語行狀ニ於テハ  
恐縮ノ狀ヲ呈シ意ヲ屈シテ外貌ニハ激烈ヲ制抑スルニ慣ル  
殊ニ憤怒ノ諸徴ヲ秘シ及對ノ証ヲ示シ運步遲々トノ顔色  
怡悦ス又貴人ニ對シテハ常ニ意ヲ曲テ決シテ舌ヲ自在ニ



運動セシメス。絶テ抗論爭議スルヲナシ村落ニテモ市街ニテモ屋内ニテモ夫婦ノ間ニテモ老少ノ間ニテモ師弟ノ間ニテモ總テ此ノ如シ其為スヘキ所ハ固信シテ十分ニ行フ若シ怒ルハアレハ互ニ和ヲ講ス或ハ過失アル時之ヲ責ムルニ酷ニ過クルモ尚之ヲ忍ノ裁判及勸解ヲ要スルヲ極テ稀ナリ且偶裁判アルモ我本國ニ於ケルトハ異ナリ其不平怨恨アレハ之ヲ貯テ以テ鬪争ニ訴フ又各自相集會スルニ方テ其朋友ニ家事困難貧窮及悲歎ノ事件ヲ口外スルヲ甚ク稀ナリ又不時ノ悲歎及無益ノ難談談話ハ敢テ他人ノ歡樂及寧靜ナル時ニハ之ヲ告クルヲナシ他人之ヲ向フヲアレハ苦突シテ全事ヲ告ケス僅カニ一斑ヲ

以テ答フ。抑モ余カ聞見スル所ニテハ人生榮枯得喪盛衰浮沉ノ變遷容易ナルヲ日本ニテハ常事ナリトス卑賤ノ人俄カニ王候ト為リ又高貴ノ人忽チ凋零シテ貧困トナル此ノ如ク交番轉移スルヲ以テ大ニ榮譽ノ念ヲ固ム然レモ之ヲ得ルヲ亦容易ナラス意志不撓耐忍以テ之カ準備ト為スナリ既ニ得ル所ノ榮譽ハ帝ニ祖先ヲ輝カスノミナラス更ニ子孫ヨリ初生兒ニ累及温飽安逸ヲ逞ニスルニ足ルナリ以上説ク所ハ日本人ノ好所ナリ然レモ其大ニ



憤怒シ易キ性アルヲ以テ之ヲ汚穢セリ。第一信心及善惡可否ノ目的ニ於テ大ニ惑フ所アルハ猶他ノ基督教ヲ知ラサル國人ニ同シ。信心及學術ハ上ニ記スル所ノ坊主ノ教授スルニ依頼ス。但シ各種ノ學派宗徒アリト虽天命ヲ説キ魂魄不死ヲ説カサルハ一ナリ而ノ或ハ一途ニ他顧ナク佛ヲ信スルハ秘密貴重ナリトスルトノ別アリ。曰ク凡人ヲ諭スニハ地獄苦責ノ説ヲ以テ恐怖セシメ以テ其心ヲ懾加スルニ過キスト。此ノ如キ迷誤ヲ来ス所以ハ二人ノ舊教徒阿彌陀

神 傳  
陀及釋迦ヲ尊信スルニ由ル凡ソ信心スルニハ疑惑或ハ悲哀スル中ニ方テ清淨虛無ノ心ヲ以テ請願スルヲ要トス。之ニ由テ困難事件ニ逢ヒ生命危険ニ臨テ安全幸福ヲ祈リ。罪障消滅ヲ得ヘシトス。是僞ニ愚昧ヲ示スノミナラス神聖ニ耻辱ヲ與ヒ不信ヲ表スルナリ。且佛ヲ崇ムルニ艱ムテ身ヲ毀傷スルニ至ルハ是罪障ヲ重スルナリ。阿彌陀及釋迦又他ノ諸佛ノ始祖ヲホトケト称ス。更ニ別神アリ。健康ヲ祈リ小兒ヲ索ノ金銀ヲ求ムル等凡ソ一身ニ属スル事件ヲ誓願ス。



ル中。祈念スル所アリ之ヲ神ト名ク。

王候公孫ノ行狀善言美行アル者又軍効アル者

皆之ヲ半神ト為ス一シ其不適當ニ笑フ一ク

耻フ一キハ猶希臘詩人所謂ユビテルサチエルニユ

スバギユス及他ノ諸神ノ如シ是ニ於テ日本人

次第ニ真徳ヲ失シ真教ヲ缺ク為ニ舞蹈飽食或

ハ娼妓ヲ買フノ醜行アルニ至ル内心ノ變動ハ

幼時ヨリ隱匿スルニ慣ルヲ以テ不信トナリ虚

偽トナリ詐欺トナリ或ハ戦争トナリ或ハ他ヲ

苦責スルノ後親交ヲ結ヒ怨厚トナリ又嘲弄シ

テ憤怒罵詈殘酷ナル

瑣細ノ原因アルカ為ニ不意ニ背後ヨリ人ヲ襲

ヒ一刀ノ下ニ之ヲ截リ或ハ兩刀ヲ以テ之ヲ屠

リ刀ヲ鞘ニ納メ泰然トシ談笑スル一猶一事ヲ

為サハル中ノ如キ者アリ又刀劍ノ利鈍ヲ試験

スルカ為ニ好期ニ於テ罪人ノ頭ヲ断テ或ハ肩

ヲ截ル等難事ニアラス

戦争ニ於テ掠奪セル市街及村落ニテハ火ヲ放

テ兵ヲ弄シ殺戮ヲ恣ニシ老少男女ヲ撰ハス其

首ヲ截リ其財ヲ掠ム此等ノ暴行ハ許サレ所ク



リ然此故ニ公然トノ人ヲ殺シ賊ヲ掠メ山ニハ山  
 賊アリ海ニハ海賊アリテ人民不常ノ不幸ヲ蒙  
 ルル一アルモ敢テ之ヲ制止スル者ナシ  
 妊婦或ハ藥液ヲ飲テ墮胎セシムル一アリ是坊  
 主ノ教ユル所ナリ或ハ哺乳児ノ咽喉ヲ踏テ之  
 ヲ殺ス一アリ蓋シ其母之ヲ養育スルヲ厭フニ  
 出ルアリ或ハ貧困ノ為ニ終ニ之ニ及フアリ  
 重病ニ罹ル者及異國人ハ決シテ住居スルヲ許  
 サス故ニ此輩止ムヲ得ス露天ニ泊シ人故之ニ近  
 接スル者ナシ故ニ或ハ長病ヲ經テ幸ニ一生ヲ  
 得ルアルモ多クハ大患ニ陥リ終ニ斃ル棄屍堆  
 ヲ為スニ至ル一アリ有罪人ハ其原因ニ拘ラス  
 追放流竄ノ如キ輕罪ニ處セスノ皆死ニ處ス或  
 ハ卒然トノ一刀ノ下ニ殺ス一アリ吾ヲサレハ  
 其復讐ヲ恐ルナリ或ハ入牢人ヲ車ニ載テ市外  
 ニ送り之ヲ磔ニスル一アリ  
 謀叛人アレハ之ヲ處置スル一左ノ如シ先ツ若  
 干ノ兵ヲ送テ其家ノ四方ヲ圍ミ而メ敵對スル  
 ヤ若クハ自盡スルヤヲ撰ハシム若シ其戰ハシ  
 ト欲スル者ハ直チニ戰ハシム則全家人ヲ招集



シ。闘戦シテ斃ルニ至ル。是蓋シ臭名ヲ後昆ニ遺  
ストスル所ナリ。又自裁ヲ要スル者ハ自ラ一刀  
ヲ執テ。腹ヲ斜ニ割クナリ。勇猛ナル者ハ十字ニ  
截リ。腸ノ露出スルニ及テ。其侍臣ニ命シテ。頸ヲ  
刎セシム。親戚朋友皆其屍上ニ伏死ス。此ノ如キ  
所業ハ名ヲ好ムカ為ニ由ル所ナリ。尚且父罪ア  
レハ子ニ累連スルヲ以テ。父自ラ其子ヲ手及ス  
ルヲアルナリ。

之ヲ概スルニ。日本ニハ公事ナシ。裁判ナシ。請負  
ナシ。牢獄ナシ。保証人ナシ。又罪人ヲ呼出シ。其答

辨ヲ聽ク。ナシ。裁判ハ唯兵器ニ訴フノミ。或ハ  
長上ノ意ニ任ス。大候ハ小候ヲ制シ。小候ハ臣僚  
制シ。臣僚ハ家族ヲ制ス。死生ノ權總テ長上ノ手  
裡ニアリ。

郷主及國主ハ我カ領地人民兵卒ニ注意スル。ナ  
ク。總テ近臣ニ委託依頼ス。然レ臣僚之ヲ尊  
奉敬崇ス。護兵身ヲ固擁シ。容易ニ他人ノ近接ス  
ルヲ許サス。人アリ上申スル。ナレハ前額ニ皺  
ヲ寄セ。額ニテ領シ。或ハ筆記ニテ之ニ答フ。敢テ  
一語ヲ放ク。ス。人民ヲ懇親ニ扶助スル。ナシ。驚



駭ニ由テ百事ヲ指揮ス。故ニ郡下主長ヲ怨ムニ至ル。一アリテ。屢徒黨及一揆蜂起シ。主長元ヲ失フニ至テ。一時改革スル所アルカ如キモ。久クシテ復タ前ノ如シ。故ニ同一地ニ於テ能ク久シク其職ヲ奉スルノ難シ。

往古ハ日本ハ唯一王ノ支配スル所ナリ。之ヲ王或ハ内裡ト称ス。永年無事安穩ナルニ慣テ。自肆放逸トナリ。漸ク郷主國主就中キユビ二個ノ緊要ナル政府ナリ。以テ相補佐ス。ノ輕蔑スル所トナリ。政令行ハレス。各人割據スルニ至レリ。

今日ニ及テハ内裡ノ威カハ唯群臣ノ位階官職ヲ授クルニ過キス。將軍ヨリ莫大ノ歳貢ヲ納ム。是ニ於テ政令能ク一途ニ出ルナリ。日本諸王中最モ威權アルハ京都及ヒ之ニ近接スル地方ナリ。尋常之ヲ天下ト云フ。兵馬ノ權ヲ有ス。此地ハ

近年信長ノ占ムル所ナリ。後其位ヲ羽柴絪キタリ。是信長ノ近臣ノ最ナリ。其妻子ヲ養護ス。

ヨアンネスベトリユスマヒウス氏日本ヲ説ク

一左ノ如シ曰ク。日本人ハ大ニ好學從順ナリ。而ノ能ク事理ヲ解ス。屢余カ居テ訪フ。其来ルヤ直



子ニ魂魄ノ始ヲ問フ。又其不滅ナルハ如何。何様  
 ナル人カ能ク神聖ト為ルヲ得ルヤ。造物者ハ何  
 等ナルヤ云々而シテ忽チ感悟スル所アリテ年来  
 信スル所ノ佛教ヲ棄テ耶蘇徒タラシクテ請フ  
 既ニ一回之ヲ信スレハ固執シテ變心スルコトナ  
 シ。信心ノ為ニハ敢テ困苦ヲ厭ハス。又日本人ハ  
 好奇ニシテ大ニ問フコトアリサヘリ。ウズ氏此地  
 平戸文五二十一年ニ至ルヨリ。今既ニ五月ニ及ヘリ。一  
 日トシテ坊主及衆人早朝ヨリ深夜ニ至ルマテ来  
 テ諸般ノ事件ヲ尋問セサルノ日ナシ。例之神ト  
 ハ如何ナル者ナルヤ。何ノ地ニ住スルヤ。何故ニ  
 之ヲ見ルコトヲ得サルヤ。魂魄ノ本體ハ如何ナル  
 者ナルヤ。其原始及不滅ハ如何ト。日本人固ヨリ  
 伶俐ナリ。才智アリ。故ニ眞實ナル國人ニ向テハ  
 決シテ勝ヲ争フコトナシ。諸外國人ヲ睥睨シ。鬚及  
 手ニテ之ヲ排斥ス。能ク可否ヲ判決ス。故ニ外貌  
 ニテハ坊主ヲ尊信スルカ如キモ。内心ニテハ大  
 ニ之ヲ輕蔑ス。蓋シ其行狀正シカテサレハナリ。  
 又ラスミユスチユルレシス氏曰ク。今再ニ使  
 シク。既ニ前ニ説クカ如ク。アシンドラスフリシウ



ス氏ハ。順序ヲ經テ。伯帶尼亞執政ヨリ。命シテ。ブ  
 ル。一クホヒウス氏ノ代役トナレリ。是人望ニ出  
 ル所ナリ。歸去セルジルリスヌ。一ク氏ノ代役ナ  
 ル。ア。ントニウスブルトクホルスト氏ヲ副使ト  
 ナシ。フリシウス氏ヲ正使トナシ。長崎ニ於テ緊  
 要件ヲ屢置セシム。則チ諸事ヲ整理シ。長崎ニ向  
 テ東印土商會ノ倉庫ヲ主裁セシム。阿蘭人ニ屬  
 スル此居留地ヲ畧說セントスルハ。大ニ難事タ  
 リ。抑モ此地ハ。往年<sup>ボ</sup>葡<sup>ル</sup>チニガ<sup>ル</sup>人ノ<sup>居</sup>留<sup>シ</sup>タル<sup>所</sup>ナリ。然ルモ<sup>ニ</sup>日本人其渡航ヲ禁シ。阿蘭人ヲ平  
 戸ヨリ之ニ移シ。ボ<sup>ル</sup>チニガ<sup>ル</sup>人ノ<sup>舊</sup>領<sup>地</sup>ヲ讓與  
 セシナリ。ロジ<sup>ー</sup>日本<sup>人</sup>野<sup>ク</sup>名<sup>ク</sup>ハ。一<sup>小</sup>島<sup>ナ</sup>リ。  
 長崎市中トハ。一水ヲ隔ツ。其川幅五十尺ナリ。長  
 四角ナル木橋ヲ架ス。其長サ百五十尺。幅五十尺  
 ナリ。此島ノ周圍ニ亂杭ヲ植ユ。以テ水勢ノ衝突  
 ヲ防ク。島ノ市中ニ長官ノ住居アリ。壯大ニノ立  
 派ナリ。傍ニ結構ナル花園アリ。全市分テ四區ト  
 為ス。兩側ニ各種ノ倉庫アリ。各々廣地ヲ占ム。海  
 ノ入口ニ二門アリ。美ナル廣キ石階アリ。深ク水  
 ニ入ル。以テ小舟ノ着岸ニ便ニス。島ノ中央ハ結



構ナル街道アリ家屋ニテ固遠ス。諸商人往還  
 ス其最モ多ク販ク所ノ品ハ下名ナリ。白色粗絹  
 バンシーンス。ペーリキンキス。ギーレムス。シオン  
 スガセン。シユモレギース。染料着色ノブロカー  
 デンサテ。ネン。支那ハビノス。ダマス。デシオ  
 ウエロンス。麻布。シワトケレ。デシナ。イセー  
 デ。セー。デ。ペー。サツ。バン。ホウ。黒糖。カン。ボ。チ。ヤ。メ  
 ー。ナ。ー。カ。イ。マ。ン。ス。ヘ。ル。レ。ン。紅。革。明。礬。カ。ポ。ツ。ク  
 蠟。白。糖。氷。糖。剛。鉄。綿。汗。赤。カ。ツ。シ。ア。リ。グ。ナ。緑。青。茶  
 陶製ヘルフ。龍腦。カレム。バク。麝香。支那綿。ハ。ー。イ  
 ール。及。鹿。皮。牛。皮。紙。胡。椒。象。牙。蘇。木。以。上。諸。品。多。ク  
 ハ。支。那。ヨ。リ。輸。入。ス。ル。所。ナ。リ。他。國。ヨ。リ。又。他。品。ヲ  
 輸。入。ス。

長崎通商事件ニ就キ日本帝クワネヨリ其地ノ  
 奉行ニ令スルノ如シ。寛文六十年。六月。十五年。執政  
 五人記名ス。汝輩決シテ日本人民及船舶ヲ他  
 國ニ出帆セシムルノ勿レ。若シ日本人。秘力ニ適  
 亡スル者アラハ之ヲ捕ヘテ殺セヨ。貸賤ハ没収  
 シ。舟子ハ嚴刑ニ課スヘシ。日本人他地ニ移住ス  
 ル者アラハ之ヲ死刑ニ處スヘシ。僧徒書ヲ以テ



人ヲ教化セントスル者アラハ能ク之ヲ探偵ス  
 一シ一僧ヲ密告スル者ニハ銀百スコイトヲ共  
 フ一シ之ヲ捕フル者ニハ重賞ヲ共フ一シ入港  
 ノ船舶聊タリ凡我國法ニ觸ルヲアラハ直チニ  
 大村ノ軍ヲ差向ク一シ商人ハ一人ヨリハ賣買  
 スルヲ勿レ必ラヌ衆人ヨリス一シ貴人<sup>族</sup>及軍人<sup>士</sup>  
 ハ異人ノ品ヲ購求スルヲ勿ル一シ日本人ノ仲  
 買ヨリス一キナリ外國船ノ記章アル貨物ハ代  
 價ヲ定ムルノ前ニ於テ先ツ之ヲ公告ス一シ鹿  
 絹ノ定價ハ五<sup>疋</sup>ニ報告ス一シ絹價一定セハ他  
 ノ商人ニ領承セシム一シ購求人ハ二十日內ニ  
 代價ヲ償フ一シ遠地ヨリ來ルノ船ハ九月廿日  
 ニ出帆ス一シ遲着セル船ハ着港後滞留十五日  
 ヲ許ス五<sup>疋</sup>ノ諸商人ハ七月五日ニハ長崎ニ現  
 在ス一シ否ラサレハ絹ノ分配ニ漏ル一シ平戸  
 ニ送ル絹ハ長崎ニ於ケルト同價ニテ求ムル  
 ヲ得一シ絹價一定スルノ後ニ非サレハ敢テ他  
 物ヲ賣買スルヲ勿ル一シ以上規則<sup>寛永</sup>ニ奉  
 十二年仙石大和守神原飛騨守次ニ加賀守豊後  
 守因幡守讚岐守大炊頭



フリシウス氏及ブルトクホルスト氏ハ旅装既  
 ニ備ハルノ後、<sup>慶長</sup>千六百四十九年十一月二十五日  
 前記ノ出島ヲ出立シタリ。阿蘭人二十人、共カ三  
 人、譯官三人、日本人三十四人、隨從ス。三隊ニ分ツ。  
 此ノ如クニノ長崎ヲ辨セリ。此地ハ<sup>佛</sup>フレンボ人  
 及<sup>葡</sup>ポルトガル人ハナシガサキト称シ、<sup>伊太里</sup>イタリヤ  
 人ハナシガサキト称ス。豊後又四國ト称スルノ  
 一部ナリ。

長崎ヲ距ル一六畧六里ニ一澳村アリ。ジユホス  
 ト称ス。此漁人ハ日本他地ニ於ケルカ如ク。半番  
 ヲ穿チ小舟内ニ桶ヲ置キ魚ヲ生養スルニ供ス。澳法教様アリ  
 或ハ銚ヲ用ヒ以テ水中ノ魚ヲ射ルナリ。銚ニハ組タル索ヲ附ケ魚  
 ニ連スルマテ索ヲ弛ム。又一法アリ。ベルピング及他ノ海底ノ魚ヲ  
 澳スルニ用フ。則チ其船ノ前端ニ滑車アリ。之ヨリ線ヲ却シ末端ヲ車ニ纏ヒ餌ヲ懸ス。

長崎ハ北緯三十三度ニアリ。貿易ニ適スル一日本ノ他地ニ勝レリ。  
 人民衆多ナリ。但シ日本他地ト同シク護堀ヲ設ケス。堂塔アリ。四  
 層五層或ハ六層ナルアリ。高ク聳テ遙ニ街上ニ突出シ大ニ長崎ノ  
 外粧ヲ美ニス。市中固ヨリ大家巨屋アリテ海上ヨリ遠望スヘキモ  
 此寺塔アルヲ以テ愈見易シトス。街ヲ通シテ溝渠アリ。木橋ヲ  
 架ス。然レモ路上敷石セサルカ故ニ雨日ニハ極テ汚穢ナリ。各



街毎夜柵ヲ閉チ且看護ハ是盜賊及乱暴人ヲ防クニ供ス  
固ヨリ冗事ニアラス

家屋ノ形状大畧相同シ唯其職業及貧富ニ應シテ具材ヲ異  
ニス多クハ木造ナリ貧民ハ樹枝ニテ構成シ結土ヲ密着シ  
以テ風雨ヲ防ク有力者ハ壁ヲ粧フニ墜チ以テス床ハ地上四  
尺ニテ板ヲ敷キ奇麗ニ厚キ畳ヲ併フ

家屋ハ四角ニシテ高シ但シ日本ニハ地震多キカ故ニ傾頗チ  
怨ルヲ以テ高屋ヲ築キ難シ屋脊ハ尖カラス稍凸ニシテ斜面  
ナルヲミ側壁ヨリ延ル一四尺許或ハ廊下アリテ行人雨ヲ凌  
ク一シ或ハ岩石及常緑樹ヲ植テ大ニ飾ルアリ其傍ニ食

堂アリ目ヲ喜ハシムルニ足ル者ナシ屋脊ニ廡  
アリテ日光ヲ避ケ雨ヲ防ク其状阿蘭ニ異ナル  
一ナシ

屋脊ハ木造ナリ然レモ桶ヲ架スルカ故ニ之ヨ  
リ雨水ヲ導ク一シ更ニ大水桶ヲ供フ火災ノ用  
ニ備フナリ

家人ハ屋ノ下層ニ住ス上層ハ雜具ヲ置クナリ  
凡ソ市街村落皆木造ナルヲ以テ屢大火災ニ罹  
ル一ナリ故ニ富者ハ屋傍ニ倉庫ヲ築キ以テ諸  
貨及要品ヲ貯ヘ火災ヲ防ク災後ノ地速カニ再



ニ新築ス木材ヲ要スルノ煩ル夥シ石室ハ極テ  
稀ナリ地震ヲ恐ルナリ  
貴人ハ美屋ニ住ス多クハ二部ニ分ツ入口ノ一  
側ニハ婦女ノ室アリ他側ニハ男子住ス各室ア  
リ男子ニ要用ナル品及對客ノ要具ヲ備フ其室  
ノ美麗驚クヘシ金彩屏風ヲ室内ニ併列シ扁額  
ニ代フ遙カニ歐羅巴式ニ勝レリ  
内壁ニハ美紙ヲ貼シ巧ニ繪ヲ画ク其紙ヲ貼ス  
ルノ精巧ナルハ接除ヲ誌視スルニ難シ四邊ニ  
黒塗ノ縁アリ

某ノ室ニハ透明ノ戸アリ開閉スヘシ之ヲ開ツ  
レハ恰モ壁ノ如シ之ヲ開ケハ立派ナル室アリ  
室ノ高所ニ精画ヲ掲ク其下ニ瓶アリ園中ヨリ  
折リ来ル芳香ナル花ヲ挿ス壁ニ傍テ漆塗ノ箱  
アリ又茶器アリ或ハ壁ニ刀劍ヲ掛ルアリ是  
最上ノ粧飾ナリ精粗一ナラス  
家屋ノ外貌ハ黒彩ナク又漆塗ノ粧飾ナシ各家  
相接シテ街上ニ併列ス市街ハ總テ狭小ナリ但  
シ直線ナリ定度アリテ分割ス每街六十間即チ  
二百尺ナリ



長崎ニハ八十八ヶ町アリ。夜分ハ毎街柵或ハ門ヲ鎖シ。燈ヲ携ヘサル者ハ通行ヲ許サス。奉行ヨリノ免許鑑札ヲ所持スル者ニ非サレハ夜中門ヲ出ルヲ得ス。産婦或ハ瀕死ノ病者ニ赴クノ産婆及醫生モ此鑑札ヲ所持セサレハ敢テ通行スルヲ能ワス。此ノ如ク夜行ヲ禁スルニ因リ驚クヘキ一話アリ。街上火災アルモ門ヲ開カス。故ニ火ヲ失スルヲアレハ自ラ之ヲ消滅スヘキノイ。他人ノ来リ救ヲ望ム可ラス。此ノ如キ通習アリテ。因門スルニ由リ。常ニ屋ヲ灰ト為スノミナラス。男女老幼共ニ焼死ニ至ルヲアリ。所蘭人曾テ之ヲ親視セリ。千六百四十五年正保二年。酉後光明天皇二年長崎ニ在留ス。一夜市中火ヲ失シ。二十家灰燼トナル。多人亦室死ス。若シ強テ禁ヲ破リ門ヲ出ル者アレハ則刎頸セラルヲ恐ルレハナリ。

余火災ニテ高木  
建法ヲ改メス

或ハ全村全街。灰燼トナルヲアリ。然レモ日本人尚本造屋ヲ構フ。木材ヲ要スルヲ夥シ。殊ニ杉ヲ多シトス。美ニノ廣シ。焼斑ヲ附セサレハ。我ワリゲンヌヨート操樹ノ割板ノニ異ナルヲナシ。又多クハ



白木ヲ用フ。是阿蘭人ノカラヘシムバルス。樂器  
ヲ製スル品ニ同シ。又樟樹長サ十尺。幅四尺ナル  
アリ。

又長崎ノ周田ニハ丘陵アリ。其絶景詳スルハ得ル能ク

キヤリト。各種ノ果樹能ク速カニ繁茂ス。故ニ市

中ニ果實多シ。就中香橙及梨子又野菜ナリ。殊ニ

杉ハ高ク聳ヘ雲ヲ衝クアリ。此ノ如キハ堂宇ノ

柱トナシ。大船ノ擣トナスヘシ。

長崎ノ寺院亦木造ナリ。多クハ四角ニシテ各側四

十尺。木造塔アリ。雕刻精密ニシテ鍍金ス。此類其數

極テ多シ。但シ皆小ナリ。其雕刻ノ精巧ハ言フ族

クス。其尖頭ニ龍ヲ置キ。又屋脊ノ四方ニモ同シ

ク龍ヲ置ク。殿内ニハ忍ルヘキ異像ヲ彫ス。日本

人短時之ヲ拝シ。銅錢ヲ賽錢箱ニ投ス。

長崎ノ人民ハ他ノ東印土人ヨリハ白シ。然レモ

歐羅巴人ニ比スレハ黄色ニシテ鮮活ナラス。但シ

強壯健全。丈夫ナリ。多クハ低鼻小眼ナリ。婦人ハ

殊ニ然リ。衣服ノ製男女共ニ大ニ異ナラス。長キ

外套ヲ着ス。袴ヲ膝ニ至ル。但シ支那人ヨリハ短

シ。此外套ハ胸ニテ相交シ。其左衽ヲ右臂ニ安



シ右衿ヲ左臂ニ安ス。此ノ如クニノ帯ニテ中間  
ヲ締スルニ非ス。故ニ外套ノ左衿交叉スル所。胸  
上ニ於テ置トナク。紙ヲ狭ムニ適スル裏トナル。  
帯ノ左側ニハ長壽ノヲ通シ。両手ニテ之ヲ支フ  
ヘシ。

貴婦ノ粧ヲ所極テ華美ナリ。髪ノ結ヒ方ハ尋常  
婦人ニ異ナラス。然レモ上套ハ六ニ洞シ。且ツ貴  
重品ニテ製ス。各所ニ金彩散亂ス。廣キ衿アリテ  
頸ヲ纏ヒ。胸ニテ左右交叉ス。帯ハ洞ク四重ナリ。  
金銀糸ニテ粧飾シ。中腹ヲ纏フ。左手ニ扇ヲ携フ。

扇面ニハ花鳥ヲ画キ。金ヲ撒シ。漆ヲ塗ル。外套ニ  
ハ縫物アリテ。其下ヨリ他ノ八九條ノ絹ヲ下ケ  
垂テ尾ノ如シ。此ノ如クナレモ之ヲ着スルニ困  
難ナラサルハ。其絹ノ須精細ナレハナリ。此ノ如  
ク美粧スルモ。外出及表席ニ至ルハ稀ナリ。日暮  
快晴ニハ其男ニ伴テ散歩シ。或ハ駕籠ニ乘テ遊  
行シ。或ハ幕<sup>テ</sup>張<sup>ル</sup>舟ニ乘テ水行ス。

余阿蘭使節ニ隨テ。日本旅行スルノ記事ニ方テ。  
先ツ我盛華ナル日本帝國畧説ヲ總論スルヲ緊  
要ナリトス。日本ハ本國人ハニツポント唱フ。往時



西班牙人ハ「アルケニタ」ト呼ヘリ。千二百年ニ  
 シレ―セ。及シ「バングレイ」人名有名ナル。アウキ  
 ヌスチネルモンニキス。僧バウリユス。一ネチユ  
 ス氏ノ説ニ據リ。曰ク東ハカリホルニア。及新ガ  
 ラナグニ對ス。然レ氏海ヲ隔ツル。一千里ナリ。日  
 本ノ西ニハ高麗。及大支那アリ。海灣出入ニ準シ  
 テ遠近一ナラス。ヲンスコラニ氏ハ支那ト日  
 本トノ最近距離ヲ八十里トス。日本北ハ蝦夷ニ  
 界ス。北ニハ安南。及北西里利加アリ。南ニハ小呂  
宋諸島シシダナオキロ。及モリユスセアリ。  
 日本ハ北緯三十度ヨリ四十度ニ至ル。故ニ長日  
 ノ極ハ十四時ト四分ノ一短日ノ極ハ十時ニ四  
 分ノ一時ヲ減ス。高日ハ天頂ヲ距ル。一十度氣候  
 ハサルジニアロビユス。セーグリユスカンジヤ  
 及シ、リヤ諸島。及ヒボルチユガルアンダリユ  
 シ。ンカラナク諸國。又悉里亚刺伯波斯。及支那  
 諸國ノ一地ニ異ナラス。  
 日本分テ五部トス。山城。越後。越前。关東。及奥州ナ  
 リ。更ニ西國。及四國。アリ。マツヘウス氏ハ西國ヲ  
 九洲ト名ク。内七洲アリト云フ。然レ氏ハフランス



カロン氏ノ説大ニ信スヘキニ似タリ曰ク教王  
アリ猶四國ニ一王及三候アルカ如シ日本本島  
ニ二都府アリ京都及關東ナリマツヘウス氏ハ此  
地ニ五十三王アリト云フ就中最モ拔タルハ京  
都及アマングチウムナリ故ニ京都ハ二十四王  
ヲ指揮シ關東ハ二十九王ヲ指揮ス然レモ近年  
此諸王零落シテ一將軍ノ手ニ帰ス此將軍ハ江  
戸ニ大城ヲ築ク所ナリ

日本ニハ西國及四國ノ外尚各種ノ島アリ  
日向高島壹岐加賀平戸三宅島

ルオノネコシケベルノオキユミユルガン  
ニスノトガマノホ宮ノ島佐渡ナリ銀鑛坑及

火山多シ火焰高ク天ヲ衝クアリ四國及七種  
ケ島ノ西ニアリ

奥州ハ日本ノ北東部ナリ未開ノ蝦夷ニ接ス薩  
哈連ト蝦夷トノ間ニ入口ナシ唯荒漠ナル連山  
三十里ニテ奥州ニ接スルノミ

蝦夷ノ廣衰未タ詳ナラス山多ク貴重ナル毛皮  
ヲ産ス日本將軍時々之ヲ探訪スル為ニ人ヲ送り  
蝦夷地ノ境界ヲ求ノシムレモ未タ詳ナラス峻



ロウモキ  
スイヤ  
叛夷記

(五九)

山ヲ越テ深ク内地ニ入ルモ終ニ窮極ヲ知ラス  
土人ハ粗朴ナル野蠻人ナリ其地ノ大ナルヲ知  
ルヘシ此ノ如キヲ以テ探訪人モ歸去セサルヲ  
得ス

耶蕪教徒ロダウエーキ、フロイウス氏印土耶蕪  
教徒ニ永禄八年千五百六十五年二月二十八日京都ヨリ  
書ヲ寄テ蝦夷地方人民ノ状ヲ報スルノ如  
シ

日本ノ北部ニ一大地アリ蠻人ノ住スル所ナリ  
京都ヲ距ルノ三百里ナリ其人獸皮ヲ着テ全身  
毛アリ驚クヘキ多髭ナリ飲食スル片大ニ妨碍  
トナルカ故ニ小棍ニテ之ヲ掲ク大ニ酒ヲ嗜ミ  
鬪争ヲ好ム而ノ日本人ヲ恐ル鬪争シテ損傷ス  
レハ創所ヲ塩水ニテ洗フ以テ無比ノ良法トス  
胸ニ鏡ヲ懸テ劍ヲ頭上ニ戴テ柄ハ肩ニアリ宗  
教ナシ唯天ヲ拜ス秋田ハ極テ大市ナリ日本ノ  
東北ニアンセ地方ニアリ蠻人群ヲ為シ来テ貿  
易ス又秋田ヨリモ彼ニ至ル者アレヒ多カラス  
他方人此地ニ至ル者アレハ土人其頸ヲ劍ス  
地圖ニモ地球儀ニモ秋田以外ハ唯海トナスノ



諸氏之ヲ考フル久シケレモ未タ其詳ヲ得  
ス上ニ記スル所ノ教徒ノ説ヲ以テスルニ外人  
ハ久シク日本ニ住セルカ故ニ他ノ歐羅巴人ヨ  
リハ知ル所明カナリ日本ノ大ナルハ未タ之  
ヲ紙上ニ確記スル者ナシト虽モ尋常思察スル  
ヨリ更ニ廣大ナルヲ知ルヘシ  
又日本江戸帝將軍ノ使節ヲラシスカロン氏ノ説  
ニモ日本ノ廣衰人口詳ナラストス

故ニマスセウス氏日本ノ長サヲ三百里最モ廣  
キ所ヲ三十里トスルハ誤ナリタリユヘリウス  
氏ハ其紀事中長サヲ百五里最モ廣キヲ七十里  
トス亦誤ナリ

耶蘇教徒コル子リスハサルト氏日本紀事中記  
スル所誰カ其虚言ヲ信セン余今其全文ヲ掲ケ  
看官ヲシテ其誤ヲル所以ヲ悟ラシノ之ヲ証ス  
ルニ他説ヲ以テセントス

ヤホニーン一説ニ此新又ヤパン國人ハニ  
ッポント呼フ東方ノ海角ニアリ亞細亞ノ後端  
ナリ支那境ト相距ル遠カラス六十里ニ過キス  
亞瑪港アマカオノ西二百九十七里南ニ大海アリ何ノ



地ニ對スルヤ未タ知ル所ナシ故ニ日本入ハ世  
 界ノ端ナリト云フ大小島アリ故ニ我地理學家  
 モ群島國ト為スノミ大別シテ日本九州及四國  
 トス六十六州ニ成ル日本島ニハ五十三州アリ  
 其首府ハ京都ナリ九州ニハ九州アリ其最大ナ  
 ル者ハ肥前<sup>肥前</sup>エキユイ<sup>肥前</sup>府内及鹿兒島ナリ四國  
 ニハ四州アルノミ之ヲ總括スレハ其大サ以太  
 利ノ如シ

此笑フヘク兎戲ニ似タルノ文ハ看ル者嘔スヘ  
 シ一々信スルニ足ル者ナシ故ニ余之ヲ取ラス

蓋シ全支總テ虚言ナレハナリ其始ニ於テヤバ  
 ンヲ日本語ニテハニフポント言フトスレトニホ  
 ント言フ者アレトニッポント書記スル者ナシ又  
 支那ヲ日本ノ東トスルハ何ノ故ソヤ西ナルト  
 確然タリ又支那境日本ト相距ルト六十里トス  
 ルハ支那ノ何港ヨリ算スルヤ其更ニ遠隔ナル  
 事知ルヘシ<sup>亞瑪港</sup>ハ何ノ年月ニ航海シテ此  
 距離ヲ知ル者アリヤ無証ノ説ナリ又日本ハ大  
 海アリテ南岸ヲ隔ツトスルハ日本ノ何地ヲ何  
 地ニ對スルヲ知ラサルヤ其何ノ地ニ對スルヲ



知ラスシテ唯臆測ニ據ルヤ抑モ日本ノ南ニハ  
ハナキシマレキユイオガランテ台湾小呂宋  
諸島ミンドロミシナガナヲボルネヲセレズ  
モリユキセ及他國アリ更ニ無敵ノ海岸アリテ  
日本南海ノ彼此ノ散在スルカ故ニ日々諸國ノ  
船舶往復スル所ナリ凡ソテシク地理學ヲ講習  
スル者誰カ之ヲ知ラサランヤ日本ノ最大島九  
州及四國ニ分ラ六十六州トナシ各々首府ア  
リフランススカロン日本ニ在テ記録スル所近來  
ノ歴史中採用スル所ナリ

此國ノ富強ハ日本諸侯及ヒ諸王所領ノ金石總  
額ヲ以テ知ルヘシ歳入日本法ニ依テ石ニテ算  
ス一石ハ十カロリユスギユルデニ當ル將軍ニ  
亞テ最大歳入アルハ  
加賀越中能登ノ太守加賀中納言ナリ加賀ニ住  
ス年々収納スル所百二十萬石

駿河大納言駿河遠江三河ノ太守ナリ府中ニ住  
ス

尾張大納言尾張美濃ノ太守ナリ名古屋ニ住ス  
共ニ年々収納スル所七十萬石



仙臺中納言。政宗ハ本及奥州ノ太守ナリ。仙臺ニ住ス。六十四萬石。

薩摩中納言。薩摩日向大隅琉球ノ太守ナリ。鹿兒島ニ住ス。年々六十萬石。

紀伊大納言。紀伊伊勢ノ太守ナリ。和歌山ニ住ス。五十五萬石。

加藤肥後守。肥後熊本ニ住ス。松平イノノスコシユニキセンヘウコサ。松平伊豫守。越前オエーデ。皆殆ント同高ナリ。

奥州會津ノ加藤キボ候。備後ノ朝比奈但馬守オキニ住ス。各四十萬石。

松平長門守。周防萩ニ住ス。水戸中納言。常陸水戸ニ住ス。鍋島信濃守。肥前口ギヲイスニ住ス。松平新太郎。因幡伯耆ヲ領ス。高濱ニ住ス。共二年々三十萬石以上ナリ。

伊賀伊勢ノ太守。藤堂和泉守。ハ津ニ住ス。松平口ニユイ。備前岡山ニ住ス。井伊掃部。近江澤山ニ住ス。細川越中守。豊前小倉ニ住ス。上杉彈正。越後グニサワニ住ス。松平デンリヨウ亦。越後ホルマンドニ住ス。皆上ト殆ント同高ナリ。



又松平阿波守ハ阿波イニクツニアリ。松平越後  
守ハ高田ニアリ。松平中将ハ松山ニアリ。共ニ五  
十三萬石ナリ。筑後ノ有馬玄蕃頭ハ久留米ニア  
リ。十萬石ヲ減ス。

森美作守ハ美作津山ニアリ。鳥居伊賀守ハ出羽  
山形ニアリ。松平土佐守ハ徳島ニアリ。佐竹右京  
ハ出羽秋田ニアリ。松平下総守ハ館林ニアリ。共  
ニ二十萬石ヲ領ス。堀尾山城守ハ出雲マスガイ  
ツニアリ。生駒壹岐守ハ讃岐コクワムニアリ。十  
八萬石本多甲斐守ハ播磨タイノニアリ。酒井宮

内ハツノハクホニアリ。各十五萬石ヲ領ス。

寺澤志摩守ハ肥前唐津ニアリ。京極若狭守ハ若  
狭小濱ニアリ。堀丹後守ハ越前カハシマニアリ。  
ミンシヨウ兵庫ハ備後福山ニアリ。榊原式部ハ  
上野立石ニアリ。各十二萬石ヲ領ス。

松平河内守ハ桑名ニアリ。奥平美作守ハ下野宇  
津宮ニアリ。真田伊豆守ハ信濃コスケニアリ。立  
花飛騨守。筑後柳川ニアリ。各十萬石ヲ領ス。

小笠原右近ハ播磨カイスニアリ。イシダチホウ  
トミハ板島ニアリ。南部信濃ハ奥州森山ニアリ。



丹羽五郎九衛門ハ奥州白川ニアリ各十萬石未  
満ナリ

河部備中守ハ武州岩槻ニアリ八萬石ヲ領ス

京極永女ハ丹後田邊ニアリ牧野駿河ハ越後ワ

シガレカニアリ中川内膳ハ豊後南郷ニアリ松

平玄蕃ハ信濃松本ニアリ内藤左馬ハ常陸イワ

シロニアリ各七萬石

池田備中ハ備中松山ニアリ松浦肥前守ハ肥前

平戸ニアリ是往時東印土高會ノ長崎ニ移ル前  
ニ倉庫ヲ置キシ所ナリ各六萬石京極周防ハ信

濃上田ニアリカタセワドハ江州大津ニアリ戸

澤右京ハ出羽シンシロニアリ松平石見ハ播摩

ビソンボーニアリ松浦豊後ハ肥前島原ニアリ

石川主殿ハ豊後日田ニアリ津輕越中ハ奥州津

輕ニアリ小笠原信濃ハ播摩セカイスニアリ

又伊藤修理ハ豊後オラシニアリ堀田周防ハ

石見ダイシロニアリ脇坂淡路ハ信濃イノウケニ

アリ土岐長門ハヨヘ鳥羽ニアリ有馬左衛門亮

ハニワカウアコウダニアリ太田周防ハ大和ヲ

ウダニアリ松平出羽ハ越前大野ニアリ溝口伯

三



⑥

者ハ。越後新発田ニアリ。稻葉民部ハ豊後オウス  
 ヲロニアリ。黒田甲斐守。信濃小室ニアリ。松平周  
 防守ハ和泉岸和田ニアリ。本多左門ハ周防守ニ  
 任シ。尼ヶ崎ニアリ。一柳監物ハ伊勢カシコウニ  
 アリ。本多伊勢守ハ三河岡崎ニアリ。松平山城ハ  
 丹波笹山ニアリ。毛利甲斐守ハイガヨヘソロウ  
 サダニアリ。本多能登守ハ播磨姫路ニアリアヒ  
 トシヨウノスケハ常陸シユンドニアリ。浅野糸女  
 ハシオネカサノニアリ。内藤紀伊守ハシオネア  
 カシダラニアリ。加藤式部ハ奥州會津ニアリ。相

馬大膳正ハ奥州相馬ニアリ。本田大和ハ但馬出  
 石ニアリ。大久保長門ハ美濃加納ニアリ。内藤豊  
 前ハ出羽ヨダタニアリ。皆五萬石ナリ。  
 此諸公ノ行装極テ華美ナリ。短外套ヲ着ス。袖頗  
 ル。潤シ。外套ニハ金銀糸ノ縫箔アリ。外套ノ外ニ  
 着服ス。帯ニテ締ス。帯ニ劔ヲ通<sup>通</sup>ス。其袴ハ潤ク。左  
 右運歩ニ妨ナシ。低テ足ニ接ス。袴ノ紐ノ上ニ紋  
 アリ。

又次ニ記スル諸公ハ年々四萬石ヲ領ス。則チ稻  
 葉淡路ハ丹波福智山ニアリ。亀井デイソキハ石



見最上ニアリ。片桐出雲ハ大和龍田ニアリ。本多  
 飛彈守ハ越前九岡ニアリ。板倉周防守ハ京都所  
 司代ナリ。山城ヨリ四萬石ヲ領ス。  
 又松平豊後ハ石見中島ニアリ。亦多内記ハ播摩  
 姫路ニアリ。松平丹後ハ奥州シユケイニアリ。金  
 森出雲ハ飛彈大森ニアリ。京極修理ハ丹後田邊  
 ニアリ。皆同高ナリ。  
 三萬石ヲ領スルハ太田ギウエ美濃一ノ臺ニア  
 リ。松平右近播摩赤穂ニアリ。水谷壹岐守上野シ  
 ノタインスニアリ。今及甲斐守備中成瀬ニアリ。  
 松平大和越前勝山ニアリ。稻生周防ハ上野アシ  
 ナニアリ。松平主殿ハ三河吉田ニアリ。秋月長門  
 ハニコリスミニアリ。諏訪因幡ハ信濃諏訪ニ  
 アリ。保科兵庫ハ信濃高瀬ニアリ。菅沼織部ハ近  
 江膳所ニアリ。島津右京亮ハニコリ三田原ニア  
 リ。木下衛門ハ豊後ヒンスニアリ。宗對馬ハ對馬  
 島ノ太守ナリ。近藤信濃ハトシガオカデニアリ。  
 本多下總ハ三河西尾ニアリ。高力攝津守ハ三河  
 濱松ニアリ。新庄駿河ハ常陸土浦ニアリ。佐久間  
 肥前ハ信濃イラヤマニアリ。戸田對馬ハ美濃金



山ニアリ。本多和泉ハ常陸皆川ニアリ。徳川土佐  
ハ備中ニカイヌニアリ。松平佐渡ハ越前コノマ  
クニアリ。

次ニ記スル諸公ハ各ニ萬石ヲ領ス。則チ杉原伯

耆常陸オ、ゴリニアリ。木下宮内備中コウロシ

ニアリ。松平コイセロ播摩ハリマニアリ。稻及攝

津寺大坂城代ナリ。松平監物丹波龜山ニアリ。松

崎ハ奥州三本松ニアリ。大村民部肥前タイマツ

ニアリ。松平和泉ハ美濃岩村ニアリ。松平紀伊守

攝津ハイクトーニアリ。ミンシヨウ隼人三河コ

リアニアリ。内藤帯カハシオノイソイホウニア

リ。小笠原若狭下總關宿ニアリ。土方掃部シヨウ

ノマツサニアリ。磐城四良次シヨウノ出浦ニア

リ。六郷兵庫出羽ヒユクニアリ。竹中糸女豊後府

内ニアリ。毛利伊勢守豊後オウナシニアリ。分部

左京遠江大溝ニアリ。市橋市正コシオスニアリ。

近傍ノ小島ヲ領スル諸公ハ相良九兵衛堀美作

各ニ萬石。赤山左門細井玄蕃保科大膳松平大膳

五島ワイス。五島ヲ領ス。平戸片桐石見福島越後

小堀トモテ。高田主水三宅越後酒井右近織田石



見ナシウ攝津各一萬五千石。大田原備前外山ギ  
オ平岡儀右衛門大關衛門ハイシンゴウワスキ  
ボン織田丹後日野織部河部攝津守オタナモウ  
ソイヌ前田大和立花左近建部三五良皆川シナ  
モハネヤイジヨウ出羽守久貝因幡オイククネ  
河内丹羽キボン堀織部北條美作西郷若狹本多  
因幡三宅主膳真田内記池田撰津戸田内記皆一  
萬石

諸役人給料

大城ニ奉仕スル諸役人給料執政總裁土井大炊殿  
金十五トシ。執政酒井雅樂守永井信濃守金十ト

シ酒井信濃守之ニ同シ。酒井左衛門丞金一トシ  
ヲ減ス。アウト伯耆守金六トシ。イノテ河内守金  
五トシ。稻葉丹後守金四トシ。酒井安房守及酒井  
山城守共ニ三億トキユルト内藤伊賀守新庄因  
幡守ミソシ。隱岐守松平衛門山口タイシシモ及  
松平修理各金ニトシ。河部豊後守青山右京極  
肥前坂倉内膳成瀬壹岐及秋元但馬各一億ト半ト五ト十  
萬トギユルト堀田加賀三浦志摩前田權之助水  
野大和堀伊豆守三浦近江亮及本多三也各金一  
トシ。



御膳所及奥向作事料年々四十億ギユルデン。御  
側向金十トン以上ナリ此ノ如キヲ以テ年々表  
奥ニ消費スル所金二萬八千三百四十五トナ  
リ。

帝<sup>將軍</sup>ニ近侍スル兵隊ハ皆貴人ナリ小ナル藁<sup>菅笠</sup>帽ヲ

戴キ大ニ濶キ袴ヲ穿ツ或ハ長短ノ銃炮ヲ持ツ  
和蘭製ニ異ナラス唯引金ヲ引クニ銃手ノ後ヨ  
リセスノ離レテ之ヲ行フナリ又火藥ヲ納ルニ  
藥角或ハ革袋ヲ以テセス之ニ代フニ四角ナル  
箱ヲ以テシ筵ニテ製スルモ極テ巧ナリ腰ニ双

刀ヲ佩フ一ハ短一ハ長シ

長崎大坂  
大坂江戶陸路

再ヒ前話ヲ緬クヘシ則何蘭使節アンドラスフ  
リヒウス氏及アントニウスフハンブルトクホ  
ルスト氏千六百四十九年慶安二年己丑十一月  
二十五日長崎ヲ出帆シ日本<sup>將軍</sup>ニ進物ヲ捧ケレ  
トス阿蘭人二十名<sup>水先者</sup>内三人<sup>豊後</sup>大坂ヨリ  
江戸ニ至ルハ陸路ヲ取ル使節ノ外譯官三名日  
本人三十名ナリ

其船先ヲホウキユンダソツタ及セツ山ニ近接  
シ平戸オモダケ及牛首ノ間ヲ經テ豊後ヲ北ニ



見更ニ進テアオ。姫島及玄界ニ向ヒ長共ヲ豊後ノ左ニ見ル。又船端ニアイミシマヲ見ル。之ヲ距ル一北東十二里ニアシアリ。此市ハ白砂岸ニアリ。海上ヨリ遙カニ之ヲ見ル。一シ。蓋シ高山アリテ雲ニ聳ユレハナリ。次テ高名ナル一小邑ハミナカノ岬及小倉ヲ海ノ入江ニ見ル。小倉ハ市街ノ上下ニ二箇ノ城郭アリ。

海ハ市街ノ東ニアリ。北ニ日本アリ。南ニ四國及土佐アリ。業スルニ南北日本地方左側ニ下ノ関アリ。一小堅城アリ。但シ別ニ一大堅城アリテ高山ニ築ク。近傍ニイサカ港アリ。ニ村アリ。共ニ僅カニ四十戸ニ過キス。

此瀬戸ニ無数ノ小島アリ。一々名ヲ記セス。前ニソトガマアリ。次テ向宮島及禿アリ。此ニ島ノ間ニ上ノ関アリ。又東西日本地方ニ沿テヨウエス。ワカロトカミナガリ。及ヨコシニ諸島等アリ。村アリ。

カロトニ對シテ日本ト土佐トノ間ニ極テ高キ山アリ。樹木繁茂シテ其巔ニ達ス。船ヲ東進スルニ左方日本地ニ大市街ヲシトノミノワリビク



ナチユム。及ビクナアリ。右方シラス島アリ。更ニ  
進テシノヤ。及サムニキノ間オウシマト。及オタ  
ノ間イエシマ。及室ノ間ニ入ル。大河アリ。揖手手  
ヲ停ムヘシ。

室ハ日本地方ニアリ。極テ美ナル港ナリ。室ヲ距  
ル一五里ニ姫路アリ。一堅城アリ。好市ナリ。此地  
海水大ニ深シ。左方ニ姫路ノ外アハス竹島スヲ  
ヤヲ見テ兵庫ニ連ス。好晴日ニ着岸セリ。

之ヨリ更ニ進テ尼ヶ崎ニ至リ。十二月十三日ニ  
航海十九日ニシテ大坂ニ連セリ。則チ挽舟ニテ  
大坂ノ前市アウシマニ碇泊セリ。忽チ日本ノ小  
舟三艘来テ使節及旅具ヲ周旋セリ。

日本人造ル所ノ小舟早舟ト名ク。揖手四十人ヲ  
置ク。其船首ハ象頭ニ似タリ。スビーゲル船ノ外ノ  
ノ平クヒ見ユル所。船ノ号ヲ記カユイト船中ニ  
シ障子杯立テテ飾タル所ナリ。  
掛リノ者ド舵ハ蒲挑牙式ニ同シ。總テ木枝ヲ集  
メノ製ス。棊ノ早舟ニハ。揖手三十名。或ハ更ニ多人  
ヲ置ク一アリ。其進行迅速ナルヲ驚クヘシ。則チ  
此舟大坂ヨリ長崎ニ連スルニ十二日内ニアリ。  
而ノ其相距ル一二百二十里ナリ。



長崎ヨリ。ホーコングニ至ルニ里。ホーコングヨ

長崎ニ里。ホーコング八里。セツタ三里。セツ山ニ里。オモダキ五里。牛首八里。平戸六里。

アウオ七里。ヨベコ七里。姫島七里。玄界七里。アイミシマ七里。ヤマガノ岬十里。下ノ関七里。

オトガマ十里。武庫八里。宮島十里。亀ノ崎七里。禿三里。ヨエニ里。諏訪三里。

カロト五里。蒲刈十里。タレトミ五里。ヨウリシロ五里。ボクナチ六里。白石十里。ヒバ七里。

牛窓四里。オタ六里。室十三里。明石五里。兵庫十三里。大坂

總計 二百二十里

四里。カマガノ岬ヨリ。下ノ関ニ至ル七里。下ノ関

ヨリ。ノトガマニ至ル七里。ノトガマヨリ。武庫ニ

至ル十一里。武庫ヨリ。宮ノ島ニ至ル八里。宮ノ島

ヨリ。亀ノ崎ニ至ル十里。亀ノ崎ヨリ。禿ニ至ル七

里。禿ヨリ。ヨエニ至ル三里。ヨエヨリ。スワニ至ル

二里。スワヨリ。カロトニ至ル三里。カロトヨリ。釜

雁ニ至ル五里。釜雁ヨリ。タントノミニ至ル十里。

タントノミヨリ。ヨウリシロニ至ル五里。ヨウリ

シロヨリ。ビグナチユムニ至ル五里。ビグナチユ

ムヨリ。白石ニ至ル三里。白石ヨリ。ヒバニ至ル十

里。ヒバヨリ。牛窓ニ至ル七里。牛窓ヨリ。オタニ至

ル四里。オタヨリ。室ニ至ル六里。室ヨリ。明石ニ至







ル十三里明石ヨリ兵庫ニ至ル五里兵庫ヨリ大  
阪ニ至ル十三里ナリ

使節フリヒウス氏及ブルークホルスト氏ハ其  
從者及旅具ト共ニ大阪ニ護送セラレ此到着ノ  
評判ヲ聞テ異人ヲ觀シカ為ニ來ル者男女群集  
セリ就中橋上ニハ前面ヨリ來ル者夥シク大ニ  
混雜シ各橋重量ノ為ニ破損シ各人蹂躪シテ相  
驚ク一屢之アリ

六

別天ノ下ヨリ大洋ヲ航シ三千里外ヨリ來リ殊  
ニ日本帝<sup>將軍</sup>ヘノ使節ヲ觀シカ為ニ此危險ヲ侵シ

大阪ノ紳士好奇ノ極木橋上ニ在テ生命ノ危キ  
ヲ顧ミス輻湊スルニ至ルナリ

慶長十一年  
六月十六日  
平戸

慶長十一年使節ヤヅプスベキス氏ベイトル  
セーゲルズブーシ氏大阪ヲ經テ當時駿河ニ在  
城ノ御所撮ニ通商許可ヲ賜フノ禮辭ヲ述ルカ  
為ニ進物ヲ捧ケントス則チ六月十六日平戸ヲ  
出帆シ先ツアイミ島ニ向テ更ニアシアニ向ヒ  
終ニ小倉ニ達シ夜下ノ関ニ投錨セリ然レハ暴  
風止マサルヲ以テ再ヒイサキニ退キ之ヲ避ケ  
復タ下ノ関ニ至リタルニ風尚止マヌ潮ナキヲ



以テミアノスニ至ル。上ノ関ヲ左側ニ見ル。夜諏  
訪ニ至ル。此島ニ近接シテ錨ヲ投ス。諏訪ヨリ進  
行シタレ。風ニ逆スルヲ以テ舟子勞カ三日ニ  
ノ僅カニ六十里ニ過キス。尚助カヲ假テサルヲ  
得ス。牛窓ニ至テ。日本人四名ヲ雇フ。相助テ揖手  
二十人ト為ス。風尚東吹シ。且強シ。大ニ勞カシテ  
室ニ至レリ。狂浪ノ為ニ二船ノ覆没スルアリ。而  
ノ風候稍靜穩ニ及フヲ以テ。高浪ヲ侵シテ。進行  
ス。潮勢強烈ニノ錨ヲ留ムル。一能ワス。則竹島ヲ  
去テ。兵庫ニ向フ之ヨリ。大坂ニ進ム。航路常ニ地

方ニ沿フ。導水者ノ勇カニ頼テ。八月十六日。大坂  
港ニ至リ。乃チアウ島ニ投錨シ。輕舟ヲ雇フテ。伏  
水ニ引カシム。川水淺ク。大船ヲ通セサルニ由  
ル。午後大坂ヲ度シテ。夜中進行ス。各所淺洲アル  
カ故ニ。舟外ニ出テサルヲ得サル。一教回ナリ。

大坂ニハ。往時秀頼公住セリ。齡十八歳。脅迫シテ  
其冠ヲ奪ハル。然レ。年入極テ。夥シク。貴人及凡  
民ヨリ。献上スル所。煩ル多ク。富有無比ナリ。  
再後更ニ日本帝將軍ヘノ使節アリ。フランコシス。カロシ氏  
及ヘンリキハゲナール氏。是ナリ。千六百三十四

秀頼公大坂  
大坂落シ

フランコシス  
カロシ氏

六八  
竟  
千六百三十四



年十二月十四日出途ス平戸ヨリ航行シ夕サノ  
 入海ニテ一泊シ翌日雨ニ支エテレヨボキニ泊  
 スハカタ街及姉島ヲ過キ終ニ下ノ關ニ碇泊ス  
 茲ニテ東印土高會ハ新鮮食糧ヲ求ノリ  
 カロン氏更ニ進行セントスルニ北西風強吹ス  
 夜深テ上ノ關港内ニ入ル西岸人家アリ是ニ於  
 テ航行免状ヲ示セリカロン氏更ニ大海ニ航シ  
 テ久フシテ崩レタル島ノ間ニ至レリ雷雨止ム  
<sup>蒲刈</sup>カマガシヲ過キノワリニ向フ峻峰多キ一市ナ  
 リ海岸一角ニ立派ナル殿堂アリ其尖端ハ海上  
 ヨリ目標トナル

亮

此時ビグナチユム市ヲ左ニ見テ東北東ニ進ミ  
 牛窓ニ達ス夜堂ニ至ル是ニ於テ長崎奉行ハ河  
 蘭使節ノ譯官ヲ呼ヒ<sup>將軍</sup>帝ニ捧クルノ書ヲ得ント  
 ス依テカロン氏ハ舟子百人ヲ雇テ進行シ相協  
 カシテ明石ニ達セリ此時強風北北東ニノ波浪  
 頗ル高シ  
 明石ハ立派ナル街ナリ側ニ堅城アリ白壁水ニ  
 臨ムカリン氏兵庫ニ赴ケリ午後二時ニ大坂及  
 堺ヲ見ル日没前少時ニ大坂ニ着シ夜東印土高



會定宿五良兵衛殿ニ投宿ス  
ヒリシウズ氏及ブルトクホルスト氏大坂ヲ通  
過シ午後長崎奉行ノ旅宿ニ赴ケリ是日本僧ノ  
住居ナリシニ今使節ヲ迎フル為ニ更ニ修理ス  
ル所ナリ

柳モ大坂ハ都府ニノ京ノ領分中ニアリ河口ニ  
岩礁多ク元立ス秋川ハ北流シテ京都ヲ經テ幾  
迂曲ヲ為シ大坂ニ入ル其源ヲ湖ニ取ル京都ト  
大坂トノ間ニ砂洲多シ

此河ノ末角ニ運上役所アリ上下スルノ船舶定  
額ノ金ヲ納ム此役所ハ立派ニシ各様ノ屋脊テ  
リ

兩側ニ高山アリ其後ニ大坂川ノ東西端アリ高  
塔アリ山ヨリ拔出ス右側運上役所ニ對シテ水  
城アリ垣壁堅固ナリ海水及河水ニ當ル周固ニ  
銃窓アリ大砲ヲ備フ以テ海港ヲ防護ス此堅城  
ハ將軍様ノ築ク所ニテ其子東照宮様ノ遺志ヲ  
緬キエヲ重スル一三年寛永千六百二十九年始テ落  
成スル所ナリ

此城後ニ十個ノ倉庫アリ海ニ向フ前街アリ又



旋出セル石壁アリ。此倉庫ハ極テ廣大ナリ。而シテ  
 火ヲ免ル<sup>ル</sup>。或ハ燼燄中ニ在ルモ危險ナキ  
 ヲ保証スヘシ。  
 又其側ニ海ニ向テ極テ立派ナル倉庫アリ。此内  
 ニハ四國西國及土佐ヨリ年々獻貢スル諸貨賫  
 ヲ藏スルナリ。

此等ノ諸建築ニ兼テ水門アリ之ヨリ貨賫ヲ運  
 輸スル所ナリ。此門ニハ常ニ番卒五百人ヲ備フ  
 廣キ階梯アリテ海ニ入ル  
 之ヲ距ル<sup>ル</sup>遠カラスノ更ニ建物アリ其容積廣

大ナリ多ク木柱ヲ積ミ重ヌ大小船舶アリ。其船  
 非常ニ濶シ市街ノ多部ハ山後ニアリ。然レモ山  
 ヲ割テ水ヲ通ス。内部ニ川アリ海ヲ距ル<sup>ル</sup>遠カ  
 ラスシテ大坂町奉行ノ邸宅アリ立派ナル建築  
 ナリ四層ナリ塔ノ如ク高ク天ヲ衝ク。

此建物ト水城トノ間ニ魔佛ノ殿堂アリ日本人  
 大ニ其像ヲ尊敬ス高價ナル金冠寶石多キ者ヲ  
 頭上ニ戴ク其頭ハ野猪ニ似タリ牙アリ口ヨリ  
 挺出ス胸ニ袈裟ノ如キ物ヲ掛ク四臂四手ナリ  
 其狀奇怪ナリ一左臂ハ上ニ捧ケ中指ノ端ニ一



輪ヲ執ル他ノ一左臂ハ下ケテ全開セル百合花  
 ノ如キヲ持ツ上右臂ニハ小蛇頭ヲ持ツ之ヨリ  
 火ヲ噴ク下右臂ニハ金棍ヲ取ル足ニテ他ノ卧  
 タル魔佛ノ胸及腿上ニ立ツ此魔佛ハ怪顔ニノ  
 牛角ヲ生ス頸圍ニ卷木綿ヲ纏ヒ中間紐ニテ締  
 フ胸間ヨリ長キ尾ヲ墜ル廣キ莫大小ヲ穿ツ膝  
 ヲ過ク右臂ヲ挺出シ左臂ハ曲テ脇ニ沿フ此魔  
 佛ヲヨリシイナリデバト名ク而ノ一魔佛  
 ハヨリシイグザレナリ日本人ハ大ニ之ヲ尊  
 敬シ以テ其妨碍ヲ避ントス

西印土人亦此ノ如キ説ヲ唱フヒケリブユナリ  
 魔ヲ大ニ尊信スル一他佛ニ過ク此魔ハ青色ノ  
 臺上ニ坐ス而ノ危険ナル高所ニアリ其四隅ニ  
 ハ尖端ニ蛇頭ヲ具スルノ杖ヲ挺出ス此佛ノ前  
 頭ハ青染ス鼻上ヲ過テ兩耳ニ亘リ青線アリ頭  
 ハ鳥嘴ニ似テ羽毛ヲ束ネタル者ニテ饒ル口端  
 ヲリ金ヲ吐ク左手ニ白色ノ請ケ笠及相交義ス  
 ル白色羽毛束ヲ持ツ之ヨリヒイゲンクツキ  
 ノ御幣ヲ出ス側ニ五矢アリ墨西哥人ノ説ニ據レ  
 ハ是天ヨリヒケリビユナリニ賜フ所ナリ右手



ニ蛇状ニシテ青波條アル状ヲ持ツ胸ニ忍ルヘキ  
 ニ眼アリ腹ニ孔アリ開キタル口ノ如シ眼ト口  
 トノ間ニ異状ノ鼻アリ又此佛前ニ帷帳ヲ壺ル  
 又其周縁ニ貫珠金剛石及金鎖及各色ノ粧飾ア  
 リ  
 又魔佛テスカトリピユカアリ黒光アル石ニテ  
 造ル貴重ナル粧飾ヲ備フ口ニ銀翹ヲ啣ム長サ  
 指ノ如シ此翹或ハ綠色或ハ青色羽ヲ生ス久時  
 ノ後變色ス最下ノ毛ハ磨キタル金鎖ニテ飾ル  
 其金耳ヨリ画キタル煙ヲ現ス又両耳間ニ前後  
 ニ各種ノ貴石ヲ掛ク頸圍ニ寶玉ヲ飾リ胸ニ壺  
 ル臂ニハ金環ヲ箱ス臂ニ緑石ヲ挿ム左手ニハ  
 扇ヲ持ツ其面ハ金版ニ夕光ヲ放ツ鏡ノ如シ  
 是西哥人ハイトラセアイト名クテスカトリ  
 ピユカハ衆人ヲ罪人ナリト為ス蓋シ各人ヲ罰  
 セントスルナリ故ニ右手ニ四矢ヲ持ツテスカ  
 トリピユカノ不正人ヲ處置スルニハ如何トス  
 ヤヲ想像セシムル為ナリ  
 再ヒ都府大坂ヲ説クヘシ魔神ヨシケーデ  
 ハークス殿堂ノ後ニ川ニ浴テ番所アリ構造極



テ高シ塼ニ行クノ大道ニアリ

右側ニ大寺アリ内ニ一像ヲ置ク高サ五十尺其

頭ハ純銀ニテ製ス是ボム王ヨリ寄贈スル所ナ

リ抑モ其國ニハ銀坑多シ

左手ニ將軍帝ノ遊觀塔塔アリ山後ニアリ其尖高ク突

出ス之ニ兼テ城郭ノ塔塔アリ大段ヲ距ル南半里

ニアリ

市中ニ觀音堂アリ日本人ノ説ニテハ魚及水ヲ

守護ストス此堂ヲ距ル一數歩ニノ番所アリ其

屋脊遙々ニ壁ヲ過テ挺出ス外壁ニ向フノ一道

アリ瓦石堆ヲ為ス外壁内ニ大門アリ二重ノ丸

天井ナリ門ヲ過クレハ廣所アリ樹木多シ殿堂

ト分ツニ第二壁ヲ以テス白石灰ニテ墁ス四角

ニ分畧スル一極テ巧ナリ表面ニハ細長ク四角

ナル圍ヒアリ

内壁ノ内ニ寺前ニ六角圓門アリ屋脊高ク尖ル

是日本人貧困ナルカ為或ハ不治ノ病苦ノ為或

ハ久時廻國拜佛スルノ後自ラ生ヲ厭フテ溺死

スル者多シ其人ニ日前ニ此觀音門内ニ来リ流

ニ臨ミ身ヲ満水ニ投シ直チニ多水ヲ飲ミ自ラ



舊撰逸人  
心ヲ信ス  
七三

死ヲ求ム

此ノ如キノ自裁ハ一ルタ教徒ノ衆誓トスル所  
ニテ往時ハ獨逸人最モ佛果ヲ得ルトスル所ナ  
リタキチユス氏曰ク大洋ノ一島ニ一小森アリ  
茲ニ神聖ナリトノ尊敬スル一小車アリ衣ヲ以  
テ被フ一二僧ノ外ハ之ニ近接スルヲ得ス信心  
者其室ニ至レハ則チ之ヲ悟リ水牛ニテ引カシ  
ノ大ニ尊敬ス之ヲ向ハントスルニハ教日前ニ  
報告シ其所ヲ示ス戰時ニモ平時ニモ僧徒ハ信  
心者ヲ衆人ヲシテ圍繞シテ寺ニ至ラシム此時

車衣服信心者共ニ隱秘セル湖ニ導カル從僕此  
事ヲ進メ之ヲ為スノ後此湖中ニ入ル之ヲリ秘  
密ノ驚駭及神聖ヲ求ムルノ無智ハ直チニ死ス  
ヘキヲ知ルヘシ

文意事件不詳  
再考スヘシ

ビリブスクリエヘリウス氏舊時獨逸國ニ於テ証言ス  
曰ク上ニ記スルタルチユス島ハリユゲンニ他  
ナラス今日尚岬ニ浴テデスチユベニツ深林ニ  
スチユベシカノルアリ此内ニハ不可測ノ深  
湖アリテ水ヲ盈ツ魚類極テ多キモ舟ヲ泛ヘ又  
網ヲ投スルヲ許サス古人言フ此湖恐ルヘシト



土人皆深ク之ヲ信ス。致年前租暴人アリ。此湖ニ  
舟ヲ泛ヘ翌日魚ヲ漁セントセシニ其舟去テ往  
ク所ヲ知ラス。他人百方之ヲ求ムルニ其舟高樹  
ノ杪ニ在ルヲ見ル内ニ一漁夫アリ。群魔ノ内  
誰カ此舟ヲ此樹杪ニ置タルヤト問フニ忽チ異  
聲ヲ發シテ之ニ答フル者アリ而メ其人ヲ見ス  
群魔散テ之ヲ為シタルニアラス。余自ラ余カ  
兄弟ナルコラトスト共ニ為ス所ナリト  
啻ニリユゲンノミナラス更ニ全獨逸ニ於テハ  
ルタ佛ヲ信シテ溺死スル者少ナカラス

更ニ観音寺ヲ説クヘシ。三層天井アリ。屋脊ハ壁  
ヲ超テ六角圓状ニ突起ス。各側三層窓アリ。唯其  
弟ニト最下層トノ間ニハ廊下アリ。周縁ヲ圍繞  
ス。二十八柱アリ。側壁ニハ各種ノ貝介アリテ大  
ニ堂内ヲ粧飭ス。  
堂内ニ観音アリ。起立ス。日本僧ノ説ニテハ二千  
年前ニ存生シ。而メ日月ヲ造成セリト。其像ハ開  
キタル魚口ヨリ半身ヲ現シ。頭ニ花ヲ戴ク。四臂  
アリ。一左臂ハ上ニ捧ケ。示指端ニ環ヲ取ル。一左  
臂ハ下ケテ指間ニ花ヲ握ル。右手ハ高ク捧ケ。指



ヲ屈ス。下ノ右午ニハシケブラルスタフヲ握ル。臂ニモ頸ニモ及腹ニモ貫珠ヲ纏フ。肩ヨリニ重ニ袈裟ノ如キ物ヲ掛ク。其前ニ大ナル貝殻アリ。岩石間ニアリ。嬰兒羊身ヲ現出シ。合掌シテ觀音ヲ祈念スルノ状ノ如シ。腹圍ニ纏フノ袈裟ニハニ裾アリ。貝殻ヲ被フ。右側ニ高ク細長キ臺アリ。頗ル神前札ニ似タリ。四個ノ佛像アリ。祈念ノ状ヲ為ス。皆手ヲ寄テ水ヲ注キ線状ヲ為シテ脚傍ニアル圓桶内ニ入ル。此像及ヒ貝介ノ譬諭ハ坊主ノ他教ヲ排斥スルノ具ナリ。

更ニ觀音堂ノ右側ニアムミラトスノ住居アリ。更ニ町ニ接シテ坊主ノ立派ナル寺院アリ。二個ノ屋脊高ク聳ユ。大阪他ノ家屋ノ上ニ出ツ。兼テ一建築アリ。兵卒ノ長官茲ニ住居スルナリ。天井ノ二重ナルト。廣大ナルトニ由テ大ニ他ニ接テ現著ナルナリ。又之ニ近接シテ一ノ殿堂アリ。二百六十體ノ佛像ヲ安置スル所ナリ。其構造極テ盛大ナリ。蓋シ日本國庫ノ長官ノ住居スル所ナリ。

一ノ遠見塔アリ。其眺望ノ遠キ。陸地六里。海路



七里ヲ一目スヘシ。又驚クヘキ一寺アリ。一老僧ノ肖像ヲ安置ス。蓋シ神聖ノ憑ル所トスルナリ。殿堂ノ一部ハ海ニ臨ミ。一部ハ山ニ倚ル。又大坂ハ日本他ノ諸地ト同シク。護壁或ハ土堤ヲ設ケス。市中ニ諸川アリ。縦横貫流ス。又各様ノ橋梁アリテ。我阿蘭ニ異ナラス。兩岸ニ立派ナル家屋アリ。石灰ニテ塗墁ス。外部ハ雨水ヲ防クニ薄キ木板ヲ以テス。屋内ニ教室アリ。將軍様ノ千六百十四年ニ七艘ノ船ニ追放人ヲ載テ大坂ヨリ長崎ニ送りタルノアリ。是異教ヲ禁スルカ為

ノ所業ナリ。此時大坂ニテモ相摸殿羅馬教ヲ信スルカ為ニ耶蘇教寺ヲ禁止セシナリ。其餘勢大ニ残酷ナル事件ヲ引キ起セリ。蓋シ異教ヲ固信スルノ徒ヲ懲戒スルナリ。大坂ニハ屢戦争アリ。是日本人互ニ威權ヲ争フニ起ル所ナリ。是カ為ニ市中及城郭兵亂ヲ蒙ルルノ頻回ナリ。千六百一年太閤様薨去ノ後ニ大戦争アリ。九諸侯アリ合議シテ内府様ニ敵對ス。其巨魁ハ九ヶ國ノ太守毛利殿ナリ。自ラ四萬ノ兵ヲ領ス。皆人



内府凱戦  
大坂落城

質ヲ呈ス。太閤様ノ遺財。及ヒ軍器等。多年ヲ支フ  
ヘシ。然レモ此諸候中。意ヲ内府様ニ傾ケテ。竊カ  
ニ機會ヲ伺フ者アリ。何トナレハ上ノ諸候ハ。法  
制極テ嚴ニ。曾テ八萬ノ兵卒。或ハ戰場ニ闘死  
シ。或ハ割腹シ。或ハ敵手ニ捕ハレ。幸ニ適レテ一  
生ヲ得タル者稀ナレハナリ。

内府様ハ大坂ニテ大勝利ヲ得タリ。敗績者ハ。此  
大坂城ハ堅固破ル可ラス。百物完備。強兵充盈シ  
タルニ。敗績ノ速ナルヲ以テ。毛利候ヲ怪シム。  
毛利候ハ内府様ノ到着前ニ。勢ヲ率テ城ヲ出テ。  
大坂外ニアル。貴價ナル園圃ニ。適レ。自ラ敵兵ニ  
偏スルニ非サルノ意ヲ表ス。

内府凱戦

薩摩候ハ大ニ勇猛ナリ。驍兵六百ヲ有ス。内府様  
ノ為ニ大ニ敗績シ。内府様ニ先タツ。一二時大  
坂ヲ退キ。船ヲ索メテ。大坂ヲ距ル。一。二百里ナル  
薩摩ニ歸リ。自國ニ在テ兵ヲ練リ。以テ内府様ニ  
抗セんとス。

大坂地震

五

此ノ如キ戦争ノ外。大坂ニハ。千五百八十五年。九  
月四日。夜半。大地震アリテ。大損害ヲ蒙ムレリ。則  
チ震動劇甚。半時間ニ百回震揺セリ。人家顛覆シ



大厦高堂先ツ顔レ凡ソ有名ナル建築皆倒ル是  
太同様ノ築ク所ニテ周圍ニ堅固ナル廊下アリ  
十五萬ノ兵ヲ容ルニ足ル蓋シ支那ヨリ未使ア  
ル片此ノ如キ壯大ヲ誇示シテ其膽ヲ破ラント  
スルカ為ナリ

ヒリシウス氏及ブルークホルスト氏ハ

千六百

四十九年十二月二十日ニ大坂ヲ度ス詰且先ツ

荷物ヲ輸送ス蓋シ八十二馬ヲ要スル所ナリ此

一行ハ合計四十四人ナリ阿蘭人及奉行ハ馬ニ

騎ル荷物ニハ銀船大鏡及他品々ヲ荷フ者百人

ナリ使節ヒリシウス氏及ブルークホルスト氏

ハ衆物ニ衆ル總計三百人百二十八馬ナリ

使節ノ一行ハ日午牧方ニ達シ茲ニ午餉ス四時

激ニ至ル小市ナレ凡人家稠密ナリ堅城アリ壁

ヲ築ク激候ヨリ一使ヲ送ル其行装恰好ナリ衆

物ニテ從者數人ヲ隨フ道路ハ高丘ニミテ川ニ

沿フ堤ニ沿テ田野アリ遠望目ヲ極ム全野總テ

凍返ス堤上及低所ニ彼此村落アリ堤ニハ兩側

樹木ヲ植ユ

樹木中杉樹最モ多シ其抄高ク聳ユテオブラス



チユス氏曰ク。志里ル人及ベニキール人ハ  
杉樹ヲ以テ造船ノ料ニ供ス。當時ハ日本ニテモ  
之ヲ用ユ。是怪シムニ足ラス。抑モ杉ハ華爾斯頂  
ノ液ヲ含ムヲ以テ能ク腐敗ヲ防ク。此理ヲ悟ラ  
ラサルヨリ。日本人ハ杉板ノ或時ニ於テ。發汗ス  
ルヲ見テ驚クナリ。抑モ空氣濕潤南風アル時ニ  
ハ。杉ヨリ油ヲ得ヘキナリ。此樹ハ之ヲ植ル地味  
ノ差異ニ應シテ。大小長短アリシリ。ノ山ニハ  
大ニ繁茂シ。僅カニ四月ニシテ。斃大ニ至ル。其高  
サ之ニ協フ。日本ニモ杉樹多シ。其葉ハ密ナラス。

末端棘状アリ。此杉ハ杜松ト大ニ相似タリ。然レ  
氏杜松葉ハ更ニ美ナリ。其尖高拳セス。之ヲ伐レ  
ハ。速カニ腐敗ス。又杉ハ頗ル佳香アリ。没藥ニ異  
ナラス。其實ニハ糸ノ如キ四個ノ白色核アリ。黄  
赤染料ヲ含ム。杜松子ハ黑色ニシテ。滋養不佳味ナ  
リ。  
杉樹出ル所ノ草。再斯ハ能ク屍體ノ腐敗ヲ防護  
ス。以テ永久ニ貯フヘシ。杉實ニハ三様ノ味アリ。  
内部核ノ周圍ハ淡ク。外殼ハ甘ク。肉ハ酸甘相半  
ス。全年實アリ。甲開花スルアリ。乙成熟スルアリ。



丙結果スルアリ杉實ハ大ニ温暖ナラシム又咳  
嗽瘰癧淋病ヲ治シ又之ヲ身體ニ塗レハ能ク毒  
蟲ヲ避ク  
且ツ杉ハ常緑樹ナリ挺出セル枝アリ直立シテ  
天ヲ衝ク画工真真形ヲ模写スルニ苦シム其枝  
重キニ過クレハ相共ニ支柱スルヲ能ワス實ハ  
熟スルニ及ヘハ露及雨ニ聚シテ脱落シ枝ニ圓  
莖ヲ遺ス此莖二年ヲ經サレハ尚皮ヲ存ス實ノ  
始テ生スルハ春ニアリ而シテ全熟スルニハ冬ニ  
至ル

此ノ如キ川ニ浴テ樹ホアルノ長キ土堤ヲ過テ  
阿蘭使節ヒリシウス氏及ブルトクホルスト氏  
ハ澱ヲ經テ京都ニ達セリ是巨高ノ住居スル所  
ナリ

帝城京都ハ山城ノ國ニアリ大坂ヲ距ルノ十八  
里此川源ヲ大津ト膳所トノ間ニアル湖水ニ取  
ル京ヲ距ル三里流ルノ十八里大坂ニ至リ海  
ニ入ルニ浴テ將軍ノ血ノ森アリ此名称ハ日本  
將軍信長ノ功森ニテ元ヲ矢口ニ起ル所ナリ  
之ヲ歴史ニ徵スルニ千五百八十二年  
天正十年六月



月二十二日ノ事ナリ。

信長此時將軍タルヲ以テ比叡山上ニ新街ヲ  
ルシユギヤマヲ開拓シ此街ニ一寺ヲ築ケリ而  
ノ此寺ヲ粧飾セシカ為シニ全國有名ナル佛像  
ヲ安置セリ其寺中ニ華美ナル一廟ヲ作り礎石  
ニ兵器及譬諭ノ諸狀ヲ彫刻シ石上ニ一像ヲ安  
置ス急速ニ建築落成スルニ及テ日本全國ニ高  
札ヲ掲ケ廣告ス其文ニ曰クアルシユギヤマ  
ニ築ク所ノ寺廟ニ安置スル佛像ヲ參拜セサル  
者ナカルヘシ是天地ヲ呵護スルノ佛ナレハ十

リ之ヲ示スノ後信長更ニ第二令ヲ出セリ

凡ソ信心ノ者ハ二月晦日將軍帝ノ誕日ヲ賀シ兼テ

アংশシユキヤマノ廟ニ拜スヘシト廣告示ス

ルノミナラス更ニ誓約脅迫スルニ至レリ曰ク

此三體佛ヲ定時ニ本定所ニ於テ拜スル者ハ

貧人ハ富者トナリ富人ハ愈富ヲ加ヘ壽命長久

一身病厄ヲ免カルヘク之ヲ信セサル者ハ各種

ノ災難ヲ蒙ルヘシト

此廣告ニ由テ無教ノ人民京都ニ集會シ大都會  
ナルモ此多人ヲ容ルニハ尚小ナリトス町家ニ



ハ復夕宿泊ス一餘室ナキヲ以テ都府ノ周縁  
敷里ノ地原野ニ幕ヲ張り露宿トシテ至レリ或  
ハ舟中ニ止宿スルアリ信長ノ子先ツ以三體佛  
ヲ拜シ次テ諸侯貴族參拜セリ

此事終ル後暫時ニテ恐ル一キ尾星ヲ現ス又白  
日ニ天ヨリ多クノ火ヲ雨ラヌ是信長ノ首ヲ失  
フ一キヲ天ヨリ預メ告ケ示スノ徴ナリ京都ヲ  
距ル半里ニメジユボ村アリ信長此地ニモ一寺  
ヲ築ケリ其内一佛像ヲ安置ス其面貌ハ信長ノ  
真容ヲ模スル所ナリ此像圓キ鑲製ノ蓮臺ニ坐

ス花瓣層々極テ精巧ナリ相重疊シテ周圍ニ立  
フ其像兩臂ヲ集メテ腹上ニ置ク頸用ニ袈裟ヲ  
懸ク兩端相開ク胸ニ貴重ナル粧飾アリ三重ノ  
貫珠ニテ頸及腹ヲ纏フ其冠最モ萃美ナリ是信  
長ノ自ラ嘗テ戴キレ所ナリ

永禄五年六月十四日日本全國ヲ領セシ片  
ナリ京都ニ在住セリ暴徒一萬二千人蜂起シテ  
帝ニ抗シ遠カニ京都ヲ襲テ四方ヨリ火ヲ放ツ  
公方因死シ火焰ヲ衝テ遁レ奔ル從兵僅ニ二百  
人頭及胸ニ重創ヲ受ケ斃ル者三人暴徒宮内ヲ



蹂躪ス。而ノ公方ノ母及娘ヲ見テ。残酷ニ處置セ  
リ。公方ノ妃ハ。僧院ニ遁レリ。後之ヲ發覺シテ。頸  
ヲ刎ス。

公家ノ血族死ヲ免カル者ナシ。唯公方ノ幼子ヲ  
殺サス。佛事ヲ営マシムル為ニス。尚其異志ア  
ラニ。一ヲ恐レテ之ヲ堅室ニ籠居セシム。然レモ  
竊カニ之ヲ破テ奔テ。口カ城ニ在ル幡殿ニ身ヲ  
托セリ。則テ幡殿之ヲ遇スル懇篤キ之ヲ遇シ。尾張ノ信長ト共ニ  
同心協力シテ。之ヲ保護シ。二萬六千ノ兵ヲ引テ  
公家ノ敵ヲ打ち信長容易ニ京都ヲ取レリ。則チ

焼跡ニ宮殿ヲ新築ス。職工千九百人ヲ督責シテ。  
宮殿ヲ營ミ。往時ノ壯觀ヲ復セントセリ。自ラ工  
場ニ臨テ之ヲ監督ス一工人ノ首ヲ断セリ。蓋シ其者通行婦  
人ヲ稟視センカ為ニ。被リ物ヲ掲ケタルノ不禮  
ヲ戒ムルナリ。  
柳モ信長心中竊カニ斬所アリ。他王ヲ膝下ニ  
踏ミ。自ラ王トナリ。三十玉ヲ此ノ如クナラシメ  
ント。是ニ於テ公方ノ冠ヲ取テ。己ノ頭ニ戴キリ。  
而ノ之ヲジユボノ佛像ニ載ス。其像ハ信長ノ面  
容ヲ摸スル所ナリ。其目的ハ世人ノ己ヲ尊信シ



テ佛ト為シ。追從シテ常ニ足下ニアラシムルニ  
アリ。

然レ氏衆人此ノ如キノ高慢ヲ厭フアリ。就中明

智ハ横着ナル武將ニノ大ニ之ヲ可トセス。信長

之ヲ擧テ丹後ノ太守トナシ。軍將ニ任セリ。此ノ

如キ恩惠ヲ蒙ルモ明智ハ尚嫌トセス。信長ノ

高慢ニノ自ラ佛トナルノ意ヲ惡ム。則チ天正五年八月

十二年六月二十二日。遷カニ京都ヲ襲フ。信長之

ヲ防クニ力足ラヌ。遁レテ京都ノ川ヲ越ス。森中

ニ追跡セラレ。勇テ奮テ戦フモ。終ニ弑サレタリ。

是ニ因テ此森ヲ將軍玉ノ血ノ森ト称ス。其ジユボ村

ニ築ケル寺ハ。年々銀一萬二千兩ヲ賜フ。日本ノ

一両ハ和蘭貨幣ノ五十六ストイフルニ當ル。

又信長ノ他ノ恨ミヲ受クル所以ハ。残酷ナル所

業多キト由ル。誓約ヲ破リ。許容ヲ得スノ恣ニ他

人ノ所領ヲ奪フヲ多キ由ルナリ。

再ヒ京都ノ紀事ニ及フヘシ。都府ノ右側ニジユ

ボ山アリ。其巔高ク雲ヲ衝キ且激ニ向フ。其麓ニ

ジユボ村アリ。信長築ク所ノ萃麗ナル寺アリ。深

林中ニ堂宇隱見ス。堂内釋迦ヲ安置ス。他佛ニ超



テ之ヲ本尊トス。此堂ハ常ニ用ツ之ヲ用ク一  
年一回ノミ故ニ用扉ノ日ニハ法華宗ノ人群集  
參詣スルナリ。

日本人元來宗旨ヲ區別スルノ頗ル多シ。然レモ

其最ナル者三派アリ。第一ハ神宗ナリ。死後再生

及善惡應報ノ説ヲ取ラス。坊主ハ此説ヲ神ニ歸

シ之ヲ排セシムルヲ要トス。故ニ神社ヲ建テシム。重大事件

アル時或ハ帝ニ向テ親從スルノ誓約ヲ為ス。片

ニ之ニ誓願スルナリ。各種ノ品ヲ捧ク。或ハ以テ

災難ヲ遁レントシ。或ハ幸福ヲ祈ラントス。

第二派ハ魂魄不死。轉生輪依應報ヲ説ク。トピタ

ゴラスニ同シ。ピタゴラス氏曰ク。魂魄ハ不死ノ

シテ一タビ死體ヲ出レハ他ノ萬物ニ轉移シ。或

ハ人身ニ入り。或ハ獸體ニ入り。或ハ草木ニ入ル

余固ト前言スルカ如ク。ノルキユリウスノ子ナ

ルアエタリデスナリ。ノルキユリウス曾テ余ニ

不死ノ外欲スル所ヲ望ニ任セテ授ク。ト此

時余凡ソ生時及死後ノ諸事ヲ聞知セシ。トテ請

ヒリ。此故ニ其死ニ當テ他ノ魂魄ノ如ク天ヨリ

流レ來ルノレテヲ吞ム。トテ要セス。蓋シ之ヲ吞



ハハ世上ノ履歷ヲ忘レシノシカ為ナリ。又エ夕  
リデスノ死セシ片余エウボルヒユストナリ。後  
ニヘルモテミユストナリ。當時ハべールリユス  
ニノ則チデリールノ一渙夫ナリ。而シテ終ニハ  
ダゴラストナリタルナリ。

真宗ニテハオミトナル佛ヲ拜ス之ヲ阿彌陀ト  
称ス。日本人ノ佛名ヲ數フルハ非常ニシ大ニ我  
思考スル所ニ異ナリ。何ニ由テ北南無阿彌陀佛  
ノ名ヲ及復唱フレハ幸福ヲ得ルニ足ルヤ。唯余  
ヲ幸福ナラシメノヨト祈ルニ過サルナリ。此唱名

法王

ノ數ヲ數フルニ貫珠ヲ以テス。バウス唱歌ノ風  
俗ニ異ナルトナシ。此ノ如クナレハ阿彌陀ノ自  
ラ貫珠ヲ持ツハ何ノ意ソヤ。

又日本ニハ第三種ノ教法アリ。法華宗ト称ス。釋  
迦ヲ奉ス。南無妙法蓮華經ノ七字ヲ連唱スレハ  
大幸福ヲ得ヘシト回信ス。而シテ日本人ハ以テ印土  
ヨリ來ル語ノ真意ヲ知ル者ナシ。釋迦ノ徒弟ニ  
弘法大師及行基菩薩ノ二人アリ。共ニ日本人ノ  
尊奉スル所ナリ。弘法大師ハ最モ始テ惡魔ヲ使  
役スル所ニシテ支那ノ佛法前言者及幻術ニ近キ



教ナリ。自ラ山間深林ニ身ヲ寄セ。人世ノ外ニ在  
ルナリ。

ジユボ村ニアル寺ニ釋迦ノ像アリ。ジユボハジ  
ユボ山ノ麓ニアリ。京都ヲ距ル一羊時程。大坂ニ  
至リ海ニ入ルノ源川。此村ヲ貫ク。

此川ノ両側。彼此ニ人家アリ。内側ニニ塔アリ。川  
ニ架スル橋ノ兩岸ニ立フ門アリ。之ヲ出レハ大  
阪及伊勢ニ行ク一シ。番所アリ。騎兵歩兵之ヲ警  
固ス。監察極テ嚴ナリ。火見櫓アリ。非常ニ高シ。之  
ニ上レハ王宮及膳所ノ湖ヲ見ル一ク。又アウロ



